

赤レンガでつなぐ とき、まち、ひと

～旧松本歩兵第五十連隊糧秣庫の保存利活用をめぐる～

<シンポジウム記録>

福島正樹・田中榮司・久保 亨・金井 直・土本俊和（パネリスト）

赤羽郁夫・笹本正治・小内翔一・濱田州博（コメンテータ）

武者忠彦（モデレーター）

はじめに

本報告は、2019年3月31日（日）13～17時、信毎メディアガーデン（松本市中央2-20-2）1階ホールで開催されたシンポジウム「赤レンガでつなぐ とき、まち、ひと～旧松本歩兵第五十連隊糧秣庫の保存利活用をめぐる～」の全記録です。人文学部発案による、経法学部・医学部・工学部・大学史資料センターとの共催のこのシンポジウムは、信州大学創立70周年・旧制松本高等学校100周年記念事業として位置づけ開催いたしました。

さて、現在、信州大学松本キャンパスにある「旧松本歩兵第五十連隊糧秣庫」（通称、赤レンガ倉庫）は、ひっそりとしながらも、明らかに他の戦後の建築物とは異なる佇まいを我々に見せています。戦後創立の信州大学より古い歴史を持つこの明治生まれの赤レンガ倉庫は、現代にまで続く、松本地域近現代史の語り部であり、それは日本近現代史の縮図の一つともいえるでしょう。

赤レンガに限らず、近代建築遺産の保存・再利用の動きが全国的に高まっていることは、皆さんご存じの通りです。観光スポットだけでなく、博物館、資料館、図書館として再生利用するなど、様々な利活用が全国各地でなされています。戦後の新制大学用地確保のために、様々な「跡地」が利用されてきたわけですが、「跡地」である以上、物理的な空間という意味を超えて、人々の営みを記憶する（象徴的な場所）トポスという存在になります。過去の人々の営みの痕跡を抹消しようと躍りになった時代もありましたが、現在は、そういった痕跡を見つめることで、過去の人々や社会とコミュニケーションできる装置としての重要性が広く認識されつつあるように思われます。近時「地政学」「災害記録（災害遺産）」といったことばが、一般書やニュースなどにも広くみられるようになりました。こういったことばは、その土地や、土地に関わった人の歴史環境（人文環境）を、自然環境との関りから総合的に意味づける発想に基づいています。「文理融合」ということばも、イノベーション絡みでよく用いられますが、こういったことが「真の文理融合」ではないか、と私には思えません。

さて、そんな赤レンガ倉庫そのものが、我々をして「語れ」と迫ってきた、そんな感覚が時代の力を借りて我々にはありました。「今ある私たちの姿」を説明するのが、大学の、そして学問（人文学）の一つの重要な責務の一つであります。

簡単に内容と登壇者について紹介しましょう。（人物肩書は、シンポジウム開催時当時）

シンポジウムは、「Ⅰ これまでの赤レンガ」と「Ⅱ 赤レンガのこれから」という2つのセッションに分けて行われました。セッションⅠでは、福島正樹氏（信州大学大学史資料センター特任教授）「大学史のなかの赤レンガ倉庫」が、赤レンガ倉庫をキーとしながら、近現代史における松本の、軍都から学都への変遷を豊富な資料で語り、田中榮司氏（信州大学医学部長）「医学部と赤レンガ倉庫」は、赤レンガ倉庫と信州大学医学部との関りを教えてくれます。久保 亨氏（信州大学人文学部特任教授）「市民運動史と赤レンガ倉庫」は、松本五十連隊の実態史をリアルな証言や史料を以て示し、一時は全廃の可能性のあった、この「歴史遺産」が市民運動によって残すことができた経緯も教えてくれます。ちなみに、今回コメンテータとして参加頂いた笹本正治氏（長野県立歴史館館長）が信州大学副学長時代に、この赤レンガ倉庫の「登録有形文化財」化に尽力されました。

セッションⅡでは、金井 直氏（信州大学人文学部教授）が大学と関りのある各地の赤レンガ倉庫についての現況紹介と、松本キャンパスの赤レンガ倉庫の芸術視点からの活用実態を示し、古民家の再生や教育学部キャンパス（長野）の赤煉瓦館の活用など、多くの建築の利活用に実績のある、土本俊和氏（信州大学工学部教授）が、その利活用プランの見取り図を示しています。Ⅰ・Ⅱのセッションを踏まえ、コメンテータとして参加していただいた、笹本正治氏（前掲）、赤羽郁夫氏（松本市教育長）、小内翔一氏（信濃毎日新聞社松本本社報道部記者）、濱田州博氏（信州大学学長）から、それぞれの立場を通じてコメントを頂きました。また、フロアにお越しの市民参加者の方々からもご意見・ご感想をいただきました。

本記録は、それらの発言内容を読みやすく改変する以外は、内容をそのまま掲載いたしました。当日の活気ある報告・議論の熱量が、皆さんに伝わることを期待しております。

なお、本シンポジウムにおける議論整理・円滑な進行は、武者忠彦氏（信州大学経法学部准教授）がモデレーターとして務めました。

その他、本シンポジウム開催までに当たっての実行委員会メンバーは、パネリストの他に、渡邊匡一氏（信州大学副学長・大学史資料センター長）、高瀬弘樹氏（信州大学人文学部准教授）、若林 武氏（人文学部事務長）、大竹博昭氏（医学部事務部長）、横前 守氏（信州大学研究推進部産学官地域連携課）がおり、彼らの背後からの大きな助力がなければ、本シンポジウムは開催不能であったでしょう。深い謝意とともに特に記しておきたいと思います。

多くの皆様の協力により本シンポジウムは実現し、また成功裡に終わったとの印象を持っております。こういった営みをやりっぱなしで終えるのではなく、その刻印を記し留めんがため、本記録報告は作成されました。

なお、このシンポジウムを契機として、赤レンガ倉庫保存のための寄付活動（クラウド・ファンディング）も始めました。幸い、当初の目標額は達成し、調査・修理に利用いたします。

それでは、シンポジウム「赤レンガでつなぐ とき、まち、ひと」をお楽しみください。

（山田健三（信州大学人文学部長（当時）））

セッションⅠ：これまでの赤レンガ

武者 そろそろ時間になりましたので、始めさせていただきますと思います。私は本日の全体のモデレーターを担当いたします信州大学経法学部の武者と申します。本日はこれより「信州大学創立70周年・旧制松本高等学校100周年記念事業」のプレ・シンポジウムとして、『赤レンガでつなぐとき、まち、ひと～旧松本歩兵第五十連隊糧秣庫の保存利活用をめぐる～』というタイトルのシンポジウムを始めたいと思います。今日は4時間という非常に長い時間のシンポジウムになりますが、できるだけ退屈しないよう、レイアウトも実はちょっと変わっております。普段われわれはこちらを向いて、聴衆のみなさんと相對するパターンなんですけども、本日はこのように円形の向かい合わせにして、できるだけ議論中心に進めて、あまり堅苦しくない形でこの赤レンガについて語り合う、そういう主旨でこのようなレイアウトにさせていただきます。

本日のプログラムですが、前半のセッションはどちらかというと、これまでの赤レンガのことについて、それから後半のセッションでは、これからの赤レンガについて、ざっくりばらんに語っていききたいというふうに思っております。

それでは最初に開会のあいさつとしまして、本学の人文学部長、山田先生より一言お願いしたいと思います。

山田 皆さん、こんにちは。私、人文学部長を務めております山田と申します。このシンポジウムの計画の言い出しっぺの一人として、一言ご挨拶させていただきます。本日はお忙しい中、また、とても天気も良くて行楽に行きたいところを、多くの方にお集まりいただきまして、本当にどうもありがとうございます。今、武者先生よりお話がありましたが、今年の6月に信州大学は創立70周年、前身の一つである旧制松高から数えて100年という、記念すべき年を迎えます。この時期を借りまして、松本キャンパス内にある赤レンガ倉庫、一実は赤レンガ倉庫というのはいろんな所にあり、重要な日本近代遺産ですが一をめぐってシンポジウムを開催することといたしました。これにつきまして、われわれはいろいろな想いがあるわけですが、いろいろ調べていくうちに、信州大学だけではなく、松本市を含めこの地域における、極めて重要なモニュメントであるということがだんだんはつきりしてまいりました。きょうのシンポジウムでは、多くの方から赤レンガをめぐる歴史についてお話しいただき、さらに、これから大学として、市民としてどのように活用していくのがより良いのかということ、大学を超えた形で皆さんにご議論いただければと思っております。本日のプログラムは、長丁場になりますけれども、是非皆さん、よろしくお付き合い願います。それでは、武者先生、よろしく願います。

武者 ありがとうございます。きょうは私以外に9名の方にお話しいただくことになっております。また詳しい自己紹介はそのときにさせていただくとして、私のほうから最初にお名前だけ、登場される順番にご紹介しておきたいと思っております。まず、最初は福島先生です。大学史資料センターの先生でございます。それから次に、医学部長の田中先生でございます。それから、後ほど市民運動の関連でお話しいただく、人文学部の久保先生でございます。それからセッションⅡに入りまして、最初に芸術の観点からお話しいただく人文学部の

金井先生です。次に、建築の観点からお話しただくことになっております工学部の土本先生です。

それから最後に全体討論をしたいと思っております、そこでのコメントータを4人の方をお願いしております。最初に、松本市の教育長の赤羽さんです。それから、長野県立歴史館の館長でいらっしゃいます笹本先生です。それからここ信毎の松本本社で大学の取材を担当されています小内記者でございます。最後になりましたが、信州大学学長の濱田先生でございます。

このように、本日はメンバーだけでも非常に盛りだくさんの内容になっておりますので、早速、内容に入っていきたいと思っております。最初にまず、この赤レンガというものが大学の中で、もっと言えば松本という都市の中で、どのようにして息づいてきたのかということをお福島先生からお話ししていただければと思います。先生、よろしくお祈りします。

1 大学史のなかの赤レンガ倉庫

福島 よろしくお祈りします。信州大学70周年、松本高等学校100周年の節目に大学の歴史を振り返って、この機会に保存すべきものは保存し後世に残そうということで、2017年4月、大学史資料センターがオープンしました。そこにお祈りします福島と申します。

今日のテーマの赤レンガ倉庫も保存すべきものの一つです。そこで、この赤レンガ倉庫について、これが松本の地域的広がりの中でどのように存在してきたのか、また、軍事施設としての倉庫が、その役割をどのように変化させて現在にまで残ってきたのか、この2つの側面から赤レンガ倉庫についてお話ししていきたいと思っております。

そういうふうにお祈りしたのは、大学の歴史を考える場合に二つの側面があるということがあります。第一に、大学に関係する文書や歴史的建造物、そういうものから大学の歴史を明らかにする。第二に、大学の歴史は、大学を含む所の地域の中で育まれますから、その地域とどういう関わりを持って大学が存在してきたのかと、そういうことを明らかにすることも、大学の歴史を明らかにする、もう一つの重要な仕事だと思っております。

信州大学は長野県の中に複数のキャンパスを持っていて、広域的な広がりを持っています。ですから、信州大学の歴史を明らかにすることは長野県の歴史を明らかにし、信州の歴史を明らかにすることにも通じてくるような、そういう視野が必要になると思っております。今回は松本キャンパスの赤レンガの話ですから、具体的な話は松本キャンパスに絞らせていただきます。

松本市は今、3ガク都と特徴付けていますが、市立博物館が発行している『松本まるごと博物館 ガイドブック』では、「学都・岳都・楽都」となっていますが、岳都・学都・楽都、という順番で記される場合もあります。大した問題じゃないかもしれませんが、でも学と岳が冒頭にあるってということは、要するに松本が人文的条件では学・楽が、自然的条件では岳という、地域的特色の上に成り立っているということで私は納得するんです。

「学」が筆頭にあることで言うと、開智学校が筆頭に挙がると思っておりますし、松本高等学校も挙がると思っております。そして、今日の話のなかで信州大学をそこに位置づけたいわけなんです。ということかということ、歩兵五十連隊という、軍都松本の遺産を引き継いで、信州大学の

旭キャンパス（現在は松本キャンパス）が成立するわけです。軍都の象徴五十連隊の地に立地した信州大学は、戦後、学都を構成する存在となる。今回の報告では、軍都から学都という大きな流れの中で、信州大学の占めていた、あるいは信州大学の前身校が占めていた松本における位置、エリアってというのはどういうふう存在していたのか、そういう観点からも考えてみようと思います。

開智学校・松本高等学校という「学都」を構成する遺産に加え、五十連隊から信州大学への転換を、軍都から学都への転換として位置づけることができます。

ところで、信州大学には、明治期に建てられた三つのレンガ造りの建物があります。まず本日扱う松本キャンパスの医学部資料室＝旧松本歩兵第五十連隊糧秣庫。次に長野教育キャンパスには、教育学部同窓会が赤レンガ館と呼ぶ旧長野県庁書籍庫があります。それから上田キャンパスには繊維学部資料館がありますが、これは旧上田蚕糸専門学校貯蔵庫でした。この三つのうち、長野と上田は修理も行われ活用の仕方が決まっていますが、医学部資料室は修理したうえで活用の仕方を考える課題が残されています。

実は、松本キャンパスには医学部資料室以外にもう二つ、レンガ造りの五十連隊由来の建物が現存していると思います。今写っているのは糧秣庫です【写真1】。入り口に登録有形文化財の銘板と解説パネルがありますが、松本市も説明板を北門外に設置しています【写真2】。

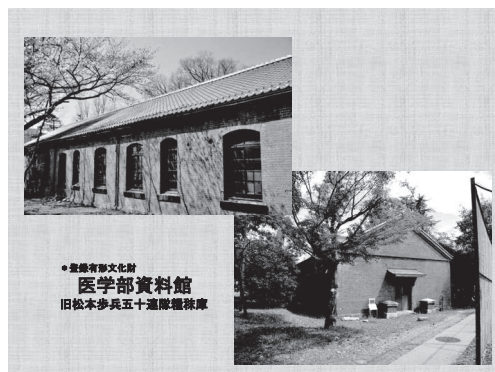


写真1



写真2



写真3

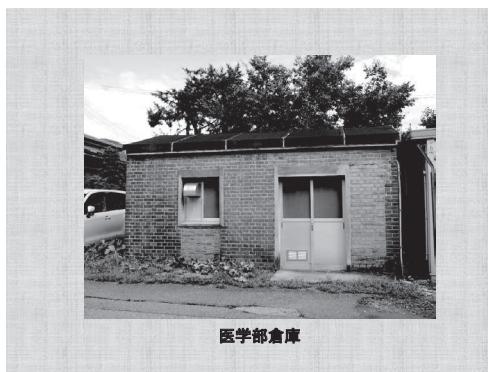


写真4

これが医学部サークル室です【写真3】。糧秣庫の西側へ行った所にあります。北西の隅の部屋が軽音楽部で、たまたま学生がいるときに中を見せてもらいましたが、部屋のボードに「第2病理剖検準備室」と書いてある札が掛かっていました。いつからあったかなど詳細はわかりませんが、このあたりに解剖実習のための建物があったことを裏付けています。

次に医学部倉庫があります【写真4】。施設台帳では1940年の建築とされています。だいぶ改造がなされていると思います。

以上、糧秣庫を含めた三つのレンガ造り建物が五十連隊と松本キャンパスの関係を現時点において具体的に示す資料です。

ちなみに、連隊の糧秣庫で、活用されたり文化財だったりするものに、山梨大学の四十九連隊の糧秣庫や、奈良教育大学の五十三連隊の糧秣庫があります。規模的には信州大学のものとほぼ同じで、300平米ぐらいだと思います。だから、恐らく設立した年代も全部同じ時期ですので、同じ規格として造られていると考えられます。

城下町から近代の軍都へー軍用地のうつりかわり

そこで、次に軍都・松本の歴史と発展についての話に移ります。まず、松本（旭）キャンパスの起源の話です。松本キャンパスは明治40年に設置が決まった陸軍歩兵第五十連隊の兵営地に起源がありますが、実は、その起源は五十連隊設置から、さらに明治8年までさかのぼるのです。この年は、桐地籍に6万坪の用地が陸軍省所轄地（兵営予定地）として確保された年になります。当初兵営地候補として考えられた旧松本城郭地が狭いと判断され、桐地籍に代替地を求めたのです。

少し詳しく話しますと、旧松本城郭地というのは、本丸、二の丸、三の丸のことです。本丸は陸軍省、二の丸は筑摩県庁などの用途に使われ、三の丸は有力家臣団の居住地でした。明治8年に陸軍の兵営を松本に置くという計画が持ち上がり、当初旧城郭地を陸軍の兵営地と想定しましたが、三の丸の民地化という事情もあり、郭内総面積約5万5000坪にかえて、郊外桐地籍に6万坪の用地を確保した。これが明治8年の出来事です。計画は実施に至りませんでした。用地は陸軍省の所轄地となりました。これが松本キャンパスの起源です。

これで用地が確保されたのですが、分営地としての用地の使い方ではありませんでした。政府はその分営予定地を、陸軍省の土地として持ち続けました。明治30年に高崎歩兵第十五連隊が松本に移されることになり官報告示もされましたが、予算額と実際の入札の額が合わなかったことから移駐は中止となりました。このときに4万坪が確保されました。明治8年の段階で確保された6万坪を加えると、合計10万坪の土地が、陸軍省管轄の土地としてこのときに松本のエリアの中に存在していたということです。

明治40年、五十連隊の松本設置が決定して、もう一度、用地を再設定する必要がでてきました。後で述べますが、この間いろいろな問題があって、長野県のほうに土地を貸し下げたり、兵営以外の用途に使ったりしました。だから、再度それを国のほうに引き上げる必要が生まれました。どこの土地がどうなったのかという詳細は不明ですが、いずれにしてもこのときに10万坪の土地を兵営地として再設定したわけです。それを図に表すとこうなります。黄色いところが旧城郭内（本丸・二の丸・三の丸）。赤いところが10万坪の土地です【図1：城郭地・連隊兵営地の図】。

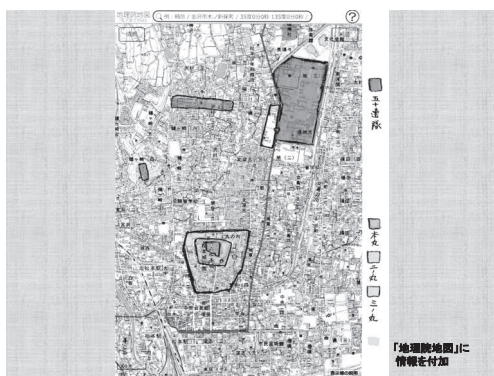


図1

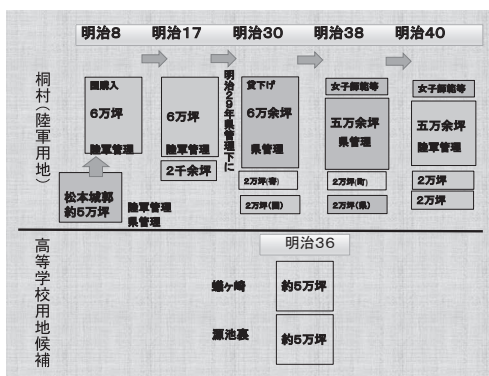


図2

次に、明治8年、17年、30年、38年、40年と、桐村にあった陸軍用地がどう変わっていったかということを示した概念図【図2：陸軍用地の変遷】をご覧ください。

明治初めに旧松本城郭地約5万坪に陸軍の兵営を設定しようとしたけれども、狭くて兵営が置けないことから、城下町の外の6万坪を国が購入し、陸軍の管理下に置きました。次に、明治17年、2千余坪の隣接地を国は買い増しました。そして、明治29年にそれらの土地はいったん、県の管理下になったのです。

次に、明治30年の高崎十五連隊の移駐計画ですが、6万坪の土地が県の管理下に入り、そのときに4万坪増えました。そのうち2万坪は町民の寄付、2万坪は国の購入ということになって、あわせて10万坪が確保されました。しかしこの時も、連隊の誘致は実現しなかったのです。

一方、県の管理下になった土地の一部を使って松本女子師範学校が明治38年に成立します。さらに繭や蚕糸に関する県立の試験場とか、そういう施設の用地にも使われましたから、元々兵営予定地として確保された用地の一部が県の用途として使われたことになります。そして、明治40年の連隊設置決定に際して、詳細はわかりませんが、全体として約10万坪の用地が確保されたのです。

以上、明治初めから40年代までの陸軍省用地の移り変わりを概観してきました。大きな流れはご理解いただけたかと思います。そこで次に、内容的には繰り返しになる点もありますが、用地の変遷を資料に基づいてもう少し詳しく跡付けてみようと思います。

松本の城郭地は、明治4年（1871年）10月に山県有朋が松本へ来て接收をし、本丸を兵部省（後に陸軍省）の管轄下に置き、二の丸を松本県（後に筑摩県）の用地として、やぐらや門などを破却し、武器を接收しました。このときに天守が競売に出されて解体の危機に瀕したという話はよく知られています。しかし、天守があった土地（本丸）をはじめとする城郭地の所有権はどうなったのかという点については、これまであまり触れられることが少なかったと思います。

この点については、まず、明治5年から7年にかけて、旧松本城郭地の利用をめぐる、陸軍省と内務省と筑摩県庁で、頻繁にいろいろな書類のやりとりをしていることが史料に残されています。また、明治6年7月には、名古屋に本営が置かれた第六師管の下で松本分営が置かれることになって、軍用地の確保が必要になった。先ほど簡単に触れましたが、明治

8年5月から8月にかけて、兵営建築地6万坪を確保しました。ただし、分営の設置は中止されてしまいました。そこで敷地は陸軍省の管轄になって、松本城郭地内を陸軍省から内務省と大蔵省に返付したのです。結局この城郭地、特に三の丸の土地は、兵営としては使われないことになりました。

松本城郭地について詳しくみると、これが【図3：松本城郭地の図】、松本城郭地の5万5228坪の図面ということになります。本丸、二の丸、三の丸が描かれています。本丸は、陸軍の用地として確保される。二の丸は筑摩県に譲られて、県の用地になっている。現在も松本城の本丸は国の用地です。二の丸の一部は松本城公園ということで、これは県の用地になっているようです。それから三の丸はもともと藩の用地から国の用地・政府の用地に引き継がれましたが、払下げが行われたり、買取ったりして、民有地になっていきました。

それに代わって確保されたのが、桐村の用地です【写真5】。左側が北で、右側が南です。200間×300間のほぼ四角の、6万坪の長方形の土地が確保されています。この敷地の中には浅間道と、岡田道（善光寺街道）が通っていたようです。浅間道も岡田道も現在は残っていません。浅間道は五十連隊の敷地に埋もれ、松本キャンパスに引き継がれます。岡田道は善光寺街道で、兵営地として確保されたことから、境界に沿って直線の道に付け替えられました。今の萩町から、安原からずっと北上して、元原を通るまっすぐな道がそれにあたります。



図3

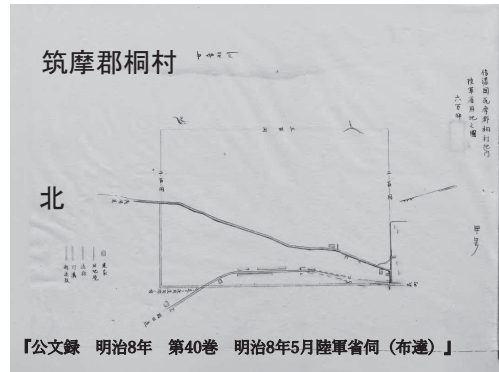


写真5

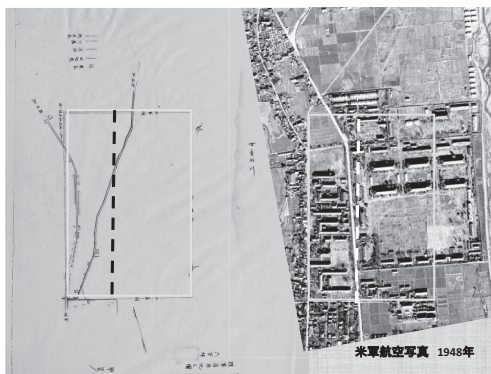


写真6



写真7

この6万坪の敷地の中には道以外に多くの民有地があり、家屋も桑畑もありました。そういうものの用地の保障とか移転料とかというものも全部、計算されています。その金額は、1万3066円です。

この用地に後に歩兵第五十連隊の兵営や練兵場などが置かれ、現在の松本キャンパス（附属学校園の敷地を含む）へと引き継がれているわけです。

昭和23年に米軍が撮影した松本市の空中写真【写真6】をみると、連隊の兵営が6棟見えます。これが今、松本キャンパスのちょうど中心で、南側の空き地になっている所が現在の附属病院の所になります。

次に、この明治8年に確保された土地やその周辺がどのように変遷していったかということ、詳しく後付けてみたいと思います。何度も繰り返しますが、明治8年以降、桐村の敷地は陸軍省用地として確保された。しかしその後、一部は民間に貸し下げ、大部分は長野県に貸し下げています。貸し下げるといふ行為は所有権を移すのではなく、管理権というか、用益権というか、そういうものを県に許可した。書類がないので貸し下げた権利内容については、今後の課題です。いずれにしてもこの土地はいったん貸し下げているが、明治41年に五十連隊を設置するときに、再度国の管理下に戻されています。

ところで、明治19年に作成された「松本市街地」という掛軸になった地図【写真7】には、北の隅に陸軍用地の一部が線で表現されており、用地が確保されていたことを示しています。このことと関係するのかもしれませんが、善光寺街道以外に、もう1本城下町から北上する道が開かれます。

まず、明治22年に、南深志町と北深志町が合併して松本町が誕生します。明治23年には、城下町の東部を通る善光寺街道の途中から分かれてまっすぐ北上し、上田へとつながる「第二線路」（現国道143号線）を通してあります。松本キャンパスと附属松本学校園との間を通る道です。

次に、旧『松本市史』によると、明治29年、陸軍省管轄の下にあった軍用地6万坪余を、長野県に「払下げ」しています。この払下げは先ほど述べたように、管理権の県への移動を意味します。

明治30年、高崎の歩兵第十五連隊の松本移駐が決定します。すると、これまでの軍用地（前年に県の管轄となった6万坪）に加えて、新たに松本町に7000坪、本郷村に3000坪、岡田村に1万坪、合計2万坪を買い上げて、さらに、松本町が町民から2万坪を募集し、用地を確保しました。陸軍省から技師が来て、兵営の敷地を実測して境界に杭を打って、衛戍病院（陸軍病院）、射的場、陸軍墓地などの用地を確保しましたが、結局、予算が超過したとみられ、移駐は中止になります。

松本町寄付の2万坪は、町が無償下付を願い出て町有地に戻り、陸軍省買い上げの2万坪の土地について、長野県に払い下げることになりました。これは、長野県と松本町に用益を任せるといふことです。その表れでしょうか、明治32年に旧松本城址の官有地を長野県に払い下げることが行われています。ちょうどこの時期に、二の丸にあった松本中学の校庭が狭いということで、本丸を校庭にするということがこの時期行われているので、関連があると思います。

こうして長野県の管轄になった用地の一部は、明治38年に開校した松本女子師範学校の敷

地になりました。現在の教育学部附属松本中学校園の場所に該当します。

さて、明治38年に結成された歩兵第五十連隊は明治40年に松本への駐屯が決定します。そして、明治41年11月2日に松本に入城しました。この用地には県管轄下になっていた土地に加えて、松本市と東筑摩郡は合わせて5万5000円を支払っています。この額は松本市の年間の予算を超えています。軍都松本の誕生です。

絵図や写真に見る松本歩兵第五十連隊とその施設

次に、絵図や地図、写真から五十連隊を見ていきたいと思います。その資料は三つあります。一つは今日みなさんにお配りした資料のなかに、「松本歩兵第五十連隊之図」という少し黄色っぽい絵図【写真8】があると思います。絵図の中には施設の名前が少し小さな文字で書かれていますが、読みやすくするために、活字を付けてあります。全体としては、兵士のいる兵営、様々な作業をする所、食料の保管、調理、そういった所に分かれます。兵営や作業所などは木造ですが、中にレンガで造られている建物群があります。

絵図の中の左側の列で、上から雑米庫、庖厨所、庖厨浴室、魚菜庫、雑采庫と書かれているもので、この中の庖厨所と書かれているもの、これが赤レンガ倉庫、すなわち糧秣庫に相当するものです。その下の庖厨浴室ですが、残念ながら平成6年に解体されてしまいました。後で久保先生から詳しくお話していただけたと思います。

右側（南側）から上側（東側）にかけて、弾薬庫とか、被服（服装）、それから靴などを作製・修理する工房があります。そして下（西側）にはこの連隊本部が描かれています。更に、真ん中左寄りに6棟の兵営が描かれています。

さて、庖厨浴室ですが、この建物の屋根は、大きな屋根の棟の上に小さな屋根を乗せる越屋根になっていることが分かりますが、これは蒸気抜きです。台所と浴室があったことは他の写真で確認できます。一方、この絵図で庖厨所と記された建物ですが、越屋根の構造は無く、通常の屋根ですから、台所を意味する建物名称と屋根の構造には齟齬があります。別の「歩兵第五十連隊之図」という絵図【写真9】ではこの建物は「総菜庫」と呼ばれていますし、戦後に五十連隊に所属していた元隊員への聞き取りでは「糧秣庫」と呼ばれていたから、食料を保管する倉庫と考えて間違いのないと思います。

さて、昭和19年、戦争遂行の中での医師不足を解消する目的で、松本医学専門学校が開校

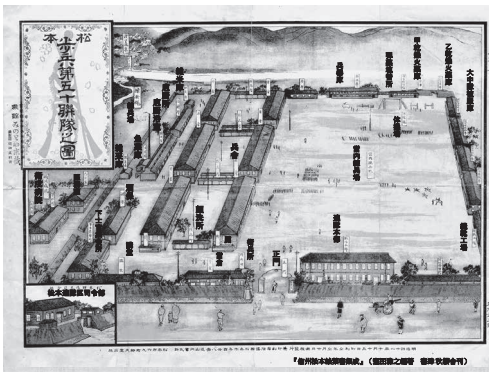


写真8

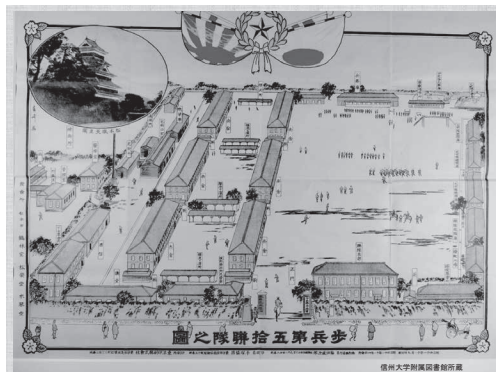


写真9

しました。戦後、五十連隊がなくなり、その跡地に昭和21年、松本医学専門学校が移転しました。五十連隊の建物は、信州大学医学部が成立した後も校舎・研究室などとして利用されました。そこで、庖厨所（糧秣庫）と記された建物がどう利用されたかをふりかえると、明治41年の絵図では庖厨所、戦後の聞き書きでは「糧秣庫」といわれましたが、昭和21年の松本医学専門学校の建物配置図【写真10】では薬品倉庫と書かれています。昭和43年には「研究室」と言われるようになり、現在は医学部資料室と呼ばれ、平成24年、登録文化財になりました。この辺のお話は田中先生にお話しいただくことになっているので、私のお話は一旦締めくくりたいと思います。

武者 ありがとうございます。なるほど、赤レンガという建物の歴史をひも解こうとすると、城下町、その後の軍都、それから今、最後にお話に出た学都という、三つのこの松本という都市のレイヤーといえますか、地層みたいなものが非常にクリアに見えてくるわけですが、特に最後の学都という部分で赤レンガが使われたのは、基本的には医学部、松本の医専から始まったということで、そのあたりについて、医学部の田中先生にお話しいただきたいなと思っています。

2 医学部と赤レンガ倉庫

田中 医学部との関係は戦後になります。信州大学医学部の前身は松本医学専門学校で昭和19年の設立です。その後、昭和23年に設立された松本医科大学を経て、昭和24年に信州大学医学部になりました。以前はお城近くの鷹匠町に附属病院がありましたが、昭和21年に50連隊跡地への校舎の移転が始まり、昭和35年には、附属病院を含め、全科・研究室が現在の旭町に移転を完了しました。その時に、先ほど来ご説明のあった陸軍の施設をお借りして、研究や教育の施設として使ったということになります。木造の建物は研究室や教室に使用し、赤レンガの倉庫は実習室に使用されたと記録には書いてあります。これらの建物使用に際して、いくつかエピソードがありますのでご紹介します。松医会という医学部の同窓会で25周年と50周年に記念誌が出されていて、それを読むと、本日のテーマである赤レンガの建物が頻繁に出てきます。それだけ注目されていたのだらうと思います。

赤レンガの建物に関連した話題でまず出てくるのが火事の話です。この火事は昭和27年2月11日の深夜に起こっていますが、改装工事用の塗装剤から出火があり、木造2階建ての建物、のべ576坪が灰になりました。赤レンガの建物の火事ではありません。ここは病理学教室が使用しており、いろいろな資料が消失したということも大きな損失でしたが、お一人の先生が亡くなられており、そういう意味でも大きな出来事だったと聞いています。

その後、病理学教室は他の教室に間借りしていましたが、1年10か月後の昭和28年12月

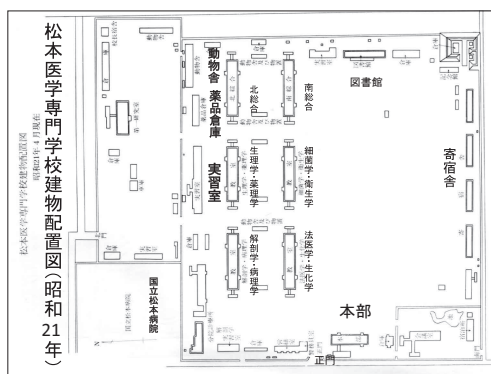


写真10

に、赤レンガの建物が病理学教室に改装されました。資料には、およそ119坪と記載されていました。

ここから少し話が明るくなります。レンガ造りの建物は、今は壊れそうな古い建物ですが、当時は非常にモダンで、レンガ造りの外観を持ち、ペチカで暖房され、内装もアカデミックであったとのこと。さらに、建物の周りにツタを植えて、趣のある建物にしようとした先生がおられ、周りがかやましがるほどすてきな建物になったということです。ですからこの時代を過ごされた先生方には非常に思い出深い建物なのかなと思います。

もう一つこの建物の功績があります。当時、最新鋭であった電子顕微鏡写真機器が共同機器としてこの建物に設置されました。その後、共同機器がここに設置されるようになり、いわゆる総合研究室として使われるようになりました。現在もこの総合研究室は活用されていますが、その前身となったという点で、医学部にとって非常に役立ったと思っております。

その後、鉄筋コンクリートの新しい研究棟が建ち、昭和42年6月に引っ越しています。現在この建物は医学部の資料室として使われています。貴重ですが非常に古い標本が置かれている状況です。

武者 ありがとうございます。いろいろ面白いですね。戦後になって軍事施設というのが全く性格を変えて、非常に、むしろモダンな、おしゃれな建物として認識されてきたということは、戦争という一つのイメージが、医学部の中でだいぶ性格を変えてきたということですね。実はたまたま先ほど直前に、赤羽教育長が標本室の標本を整理するバイトをしていたというお話を聞いて、そのときの雰囲気がかどんな感じだったのか、若干、補足で教えていただくとありがたいんですが。

赤羽 実は私は昭和46年に信大の教育学部へ入学しまして、1年は教養部にいました。当時の医学部の第二解剖学教室で南佐久郡北相木村の栃原岩陰遺跡の発掘をやって、縄文早期の遺跡で人骨や黒曜石の石器がたくさん出土して、それがまだそっくり赤レンガ倉庫の1室に大量に整理を全くせずに保管されていました。私は高校時代から考古学をやっていた関係で、ひょんなことから私も一人の先輩とで、第二解剖学教室から頼まれてそれを整理しました。当時、第二解剖学教室へ赤レンガ倉庫の鍵を借りに行き、授業の合間に入って整理をして、また鍵を返してというようなことを半年以上していました。それが今の糧秣庫なのか、壊されてしまった建物か分かりませんが、入ってすぐの部屋で医学部の学生が標本を作っていて、私も何回か見せていただいたり声を掛けたりしていました。そんなことであんまり雰囲気のいい所ではありませんでした。遺物がある部屋には、江戸時代のミイラが入ったガラスケースがありまして、仕事はいつもミイラと一緒にあんまり気持ちのいいものではなく、強烈な思い出があります。このお話があった時に、あそこで半年やったことを思い出しまして、私にとっても本当に思い出深い建物であります。

武者 なるほど。考古学の資料もそこにあったということなんですね。今も？

赤羽 このお話があって、実は先週久しぶりにここを見に行ったんです。そして外からのぞきましたら第二解剖学教室と書いた標本箱もたくさん積んでありましたので、まだ第二解剖学教室で使われてるんだと、あらためてそんな感慨を覚えたのを覚えています。

武者 ありがとうございます。当時の雰囲気が、あまり雰囲気の良い所では…という感じの感想でしたけれども。なるほど。福島先生の続きのスライドに、その当時の写真も確かいく



連隊本部を転用した松本医専、医科大学、医学部の事務局

写真11



昭和30年代の旧庖厨浴室

写真12

つかあったように記憶しています。続きを見てみましょう。いいですか。

福島 先ほども少し触れましたが、昭和21年の松本医学専門学校の建物配置図【写真10】をみると、関係するところでは、動物舎、薬品倉庫、実習室と記されています。薬品倉庫が糧秣庫にあたり、壊されてしまった庖厨浴室が実習室と呼ばれています。

この写真【写真11】は、連隊本部の建物を転用した医専、医科大学、さらには医学部の事務局です。現在の附属病院の駐車場の西端付近にあったものです。

次に、先ほど田中先生から火災の話があったのですが、昭和27年に病理学教室棟の火災があって、隣接していた実習室（旧庖厨浴室）の屋根が消失してしまいました。この屋根は、先ほども述べましたが、蒸気抜きのために二重の屋根（越屋根）になっていましたが、修理によって一重の屋根になりました。この写真【写真12】が、恐らく昭和30年代の屋根を修理した後の実習室（旧庖厨浴室）です。確かに壁際にペチカの煙突と思われる出っ張りが見えます。この昭和40年前後の写真【写真13】では、田中先生がおっしゃった「ツタ」が見えます。

武者 まさに先ほど田中先生のお話があった頃の写真だと思います。その後どんどんと時代が下って行って松本のキャンパスもだいぶ様変わりしていくわけですが、その頃から現代にかけての写真もご用意いただいたので、引き続き見ていきたいと思います。

福島 信州大学になってからの変遷について、少しお話ししたいと思います。昭和24年5月31日に信州大学は設立されました。今年は70周年で記念事業が6月1日の開学記念日に行われます。信州大学の松本キャンパスの起源は、何回も述べましたように、五十連隊の敷地にあります。昭和21年に五十連隊の跡地が松本医学専門学校のキャンパスになり、松本医科大学から、医学部が引き継ぐわけで。昭和19年の松本医学専門学校設立時には定まったキャンパスが無く、入学式や最初の頃の教室は松本高等学校を借り、やがて松本中学校に移るな



写真は昭和40年前後と思われる。

平成6年(1994)解体

写真13

ど、初代の竹内松次郎校長はご苦労されたようで、戦後すぐに五十連隊跡地が、長野県の管理下に置かれたことから、長野県と交渉して、全体の敷地の大部分をキャンパス用地として確保したわけです。

戦後のキャンパスの変遷を見る場合、正門、附属病院、国立松本病院、県キャンパスの旭キャンパスへの統合、という4つの視点から見ると、理解しやすいと思いますので、その視点を交えながら写真を見ることにします。

まずこれは後に正門となる歩兵五十連隊の正門です【写真14】。時期は昭和初期だろうと思います。次にこれは昭和24年の写真【写真15】ですが、門柱を見ると、看板が4種類掛かっています。右側から古い順に、松本医学専門学校、松本医科大学、それから信州大学医学部、信州大学本部と、これだけの看板が掛かっています。門は、五十連隊の門をそのまま転用しています。昭和24年といえば信州大学が開学した年です。どういう状態だったのかということが門柱一つで分かってしまうわけで、非常に面白いと思います。

これは医学部創立、つまり、医専が置かれてから10年ですから、昭和29年に行われた医学展のときの正門の写真【写真16】です。連隊のレンガ造りの正門は取り払われて、新しい門ができています。後ろにある建物は、白いモルタルの壁になっていて、兵舎のときには板壁だったのですが、モルタル塗りに改造されていることがわかります。

この写真【写真17】が正門から東に延びていた当時のメインストリートです。丸い植え込



五十連隊正門
(昭和初期)

『信州松本城築書集成』(蓮田雅之編著 菅原 牧穂会刊)

写真14



連隊正門 ⇒ 医専・大学正門

昭和24年

写真15



連隊正門の場所につくりかえられた正門

昭和29年

写真16



大学構内 昭和35年

写真17

みが見えますが、これは戦後、松本医専のキャンパスになった際に、竹内校長によってつくられたものです。メインストリートを、自転車で学生が走っているところです。次の写真【写真18】もメインストリートです。少し角度が違い、メインストリートの両側に木が並んで生えているのが見えます。五十連隊時代には植え込みはありませんでしたが、これは松本医学専門学校の竹内校長が連隊跡地がキャンパスになった際、丸い植え込みと同じ頃、記念樹としてケヤキの苗を二列に植えメインストリートをつくったからです。

この写真【写真19】が、同じ場所の今の写真です。真ん中の旧メインストリートの両側にケヤキの並木があることがわかります。次の写真【写真20】は、もう少し西側から撮ったところです。左の建物は医学部図書館です。

この写真【写真21】は、国道143号線から東側の旧メインストリートに向けて撮ったものです。写真の中に白く門の位置を示しましたが、これが元の正門のあった場所です。メディカル展開センターの建物と、医学部図書館の所を東西に通る道が、かつてのメインストリートだったわけです。

次に附属病院ですが、昭和19年に松本医学専門学校が開校した際に、それまで松本市立病院として鷹匠町にあったものが、附属病院になり、信州大学開学後に医学部附属病院になりました。しばらくは鷹匠町にありましたが、火災になったこともあり、旭キャンパスへの移転が昭和30年頃から35年にかけて急速に進められました。記録を見ますと、35年に移転が完



写真18



写真19



写真20



写真21

了しています。ちなみに、この場所にその後、伊勢町にあった旧開智学校校舎が移転し、併せて開智小学校の新校舎が建てられています。町名も鷹匠町から開智へと変更しています。

次に、旧制松本高等学校の敷地は信州大学開学後は県キャンパスと呼ばれ、文理学部がそこにありました。昭和41年に文理学部が人文学部と理学部に分かれ、旭キャンパスへの移転も始まりました。理学部に続いて昭和48年に人文学部が旭キャンパスに移転して、現在の松本キャンパスの学部構成が完成しました。

一方、文理学部の校舎（旧松本高校校舎）の取壊しという問題があり、これもまた、旧制松高同窓会、文理学部同窓会、松本市民の保存運動の力もあって保存が決まり、平成19年には重要文化財になっています。

それから、県キャンパスからの移転に関わって、戦前陸軍病院、衛戍病院と言われていたものが、戦後、国立松本病院になり、村井に昭和46年に移転して、その場所に人文学部が移ることになります。昭和45年までは、今の人文学部と経法学部の場所は旧陸軍病院の敷地だったということも記憶しておく必要があります。

こうして、昭和48年の旭キャンパスへの統合により、松本キャンパスとして完成へ向かっていくということになります。それをスライドで少し見たいと思います。

今の全学教育機構の所と同じ場所【写真22】です。北側から撮った写真。左側にある煙突の建物に、越屋根が付いている建物が見えると思いますが、あれが平成6年に解体された庖



写真22



写真23



写真24



写真25

厨浴室になります。

これは、今の西門の所から同じ角度で見たものです。かつての衛戍病院の正門です。位置的には西門のバス停がある所です。これが現在の状況です。【写真23】

これが1963年の松本キャンパスの航空写真【写真24】です。茶色い矢印は、連隊時代の古い建物です。黄色い矢印のうちの右側が糧秣庫で、左側が庖厨浴室です。まだ随分、1960年代前半は旧連隊の建物があったということが分かります。

これは1970年の建物の様子です【写真25】。まだ旧連隊の建物が辛うじて残っています。白い矢印は理学部の建物です。茶色い、左側の大きい矢印は国立松本病院。そこに、人文学部が移ってくることになるわけです。

これ以後現在に至るまでに、先ほど述べた庖厨浴室画が平成6年に取り壊されるなど、現時点で残っている旧五十連隊や旧陸軍病院などに関わる建物は、旧糧秣庫と1940年建設の医学部倉庫と、それからサークル部室ということになります。

武者 ついに現代まで帰ってきましたね。先ほども旧制松本高校が、実は市民の力で建物が残されたという話がちらっと出ましたけれども、今回この糧秣庫についても、そういう市民の動きというのが確かにあったということで、そのあたりについて、久保先生のほうからお話したいと思っています。

3 市民運動史と赤レンガ倉庫

赤レンガ兵舎の保存を考える会

久保 信大に赴任し5年目に当たる1993年秋に持ちあがったのが、この赤レンガの建物をどうするか、という話でした。そして「赤レンガ兵舎の保存を考える会」という集まりを市民、教員、学生有志などで発足させ、その会が医学部関係者と話し合う中で、この建物は残されていくことになります。当初は赤レンガの建物を壊すのはもったいないという程度の話だったのですが、そのニュースがメディアで報じられると、たいへん大きな反響がありました。松本連隊について、多くの人々の間にそれほど強い印象が残っていたということ自体に、自分は鮮烈な衝撃を受けた記憶があります。それが出発点になりました。

医学部教授会が建物の解体を決めたのは、1993年8月のことでした。その後、いろいろ報道もされ、調査が必要ということになり、その年の12月19日、大河直躬先生という千葉大学の建築関係の先生も見えて、調査をしてくださいました。その場で「考える会」の打ち合わせをして、21日、医学部長に申し入れを行うことになります。近代建築史上、重要な存在であり大きな意味を持つ、とし、大きなほうの建物は取り壊されるにしても、小さなほうの建物は残すということなので、これは大事にしてください、ということを中心に、調査を実施したり、部分的な保存措置を講じたり、積極的な保存利用策の検討を開始したりすることを願っています。

そして、翌年1月7日、小川医学部長と今川事務次長とお話をした際に口頭の回答がありました。その一つは、松本市に依頼し、記録保存の調査を行っているということです。これは、当時、松本市史料館の館長をされていた小松先生などが中心になり、実施されています。また大きなほうの建物の傍に置いてあった門柱などの部分的保存については交渉する余

地があるとのことでした。さらに小さなほうの建物については、当面、残すけれども、ある程度の見通しが立てば、全学の所属に移管することも可能であろうとのお話を当時伺っています。

その後、医学部との話し合いを踏まえ大学本部の藤井施設部長とお話ししたところ、兵営の正門の門柱の一番上の部分（戦後、正門を撤去した際に切断し、大きなほうの建物の傍に置いてあったもの）を、小さなほうの建物の横に移動して下さることになりました。それは今も残されています。ですからあの石柱は、本当にずっと兵隊たちを見守ってきた門柱です。屋根のふき替え工事も、この時に実施されました。

こういう話が進んできた頃、皆で会の規約を決めました。「旧松本50連隊関係の建物、ならびにそれと関連する史料・歴史的建造物等の歴史的な意味を調査検討し、適切な保存のあり方を考え、その実現を図るために活動する」と書かれています。また、やはり同じ頃に旭町中学の中学生が、五十連隊について、とてもいいビデオを作りました。元兵士の方に伺った話や建物の図面、それに中学生の感想などが入った立派なビデオです。

会では、調査の中間報告会を行うとともに、元兵士の大澤俊光さん、小野務さん、遠山栄一さん、国立松本病院におられた丸山雄造先生などから、お話を伺いました。元兵士の大澤さんからいただいたお手紙の中には、こういう文章があります。「アジアの人々を殺戮した忌まわしい出来事を二度と繰り返してはならないために、一部でも保存できればと思います。後世に残して、戒めの教訓としたいものです。南太平洋のテニアン島に散華した三千余名の旧50連隊の兵士を想い、お手紙を書きました」。これを読んで、自分は、比較的軽い気持ちで始めた自分自身の背筋がぐんと伸ばされたように感じた記憶があります。これはきちんとしておくおかなければいけない、ということです。

松本連隊について

松本連隊は、部隊が存在した37年間の期間中、計14回17年もの間、海外に派兵されています（「松本連隊の中国——満洲駐屯から南京、華北への侵攻まで」『信大史学』第43号、2018年参照）。ですから、「郷土部隊」と見えたのは、「郷土」である松本市の、あるいは長野県の人からそう見えただけであって、実は半分近くの年月、海外に派兵され、相当おぞましい経験を積むことになった部隊でした。その、おぞましい経験が、松本連隊について非常に深い記憶を残すことになったという経緯があったことが分かってきました。

一番最初、1913～15年に遼寧省の鉄嶺に派遣されました。瀋陽の北にあり、水路与鉄道が交わる要地で、今も人口270万の大都市です。鉄嶺は、日露戦争の時にロシア軍の拠点となり、その後、日本が押さえました。南満州鉄道（満鉄）沿いにあり、100年前はスライドにあるような町でした。この鉄嶺病院や鉄嶺駅は、立派なレンガ造りの建物です【写真26】。



写真26

1915年5月、この満州駐屯の松本連隊の一部が、21カ条要求を中国に強要するための軍事的示威行動に参加しました。第1次世界大戦が始まり、ドイツ軍の基地があった山東省の青島を日本軍が攻撃して占領し、山東省や満洲での日本の権益を大幅に拡大する要求を中国に突き付け、この要求をのまないと、こんどは中国を攻撃するぞ、と脅し、多くの要求を中国にのませたという事件です。この、21カ条要求をのまないと戦争をするぞと中国を脅した時の部隊の一部に、松本五十連隊の第三大隊も動員されました。

そして、その後のかなり大きな動きが、1918～25年のシベリア出兵です。日本軍全体としては、最大時7万2400人もの軍隊を7年間、ロシアの極東に派遣しました。「ロシア革命の混乱から日本の居留民を守る」ということを口実に、権益拡大のために派兵されたものです。スライドに、当時、『信濃毎日新聞』が大きく報じた「凱旋歓迎会」という記事を示しました。「功名譚を語る、四百名の来賓を前に松崎連隊長」と見出しがみついていますね。しかし、その連隊長も1920年の4月5日の戦闘で23名の戦死者を出したことやウラジオストクで赤痢の流行で21人の犠牲者を出したことに触れ、「実に遺憾である」と言わざるを得ませんでした（『信毎』1921.5.5）。

次に松本連隊が派兵されたのは1927年から1929年までです。柳樹屯という今は大連市内に組み込まれている場所ですが、写真で見ると浜辺のとても美しい所で、松本連隊の兵士がはしゃぎながら浜で泳いでいる写真があったりします。ただ、この最中に、山東省に派兵されて済南事件に関わり、中国軍との戦闘で多数の死傷者を出しました。

山東省の省都が済南です（当時の人口は約30万人、2015年現在700万人）。1928年春、国民革命軍が全国統一をめざし南方から北方へ向かっていました。これに対し、時の日本政府は、国民政府による全国統一は日本の権益にマイナスをもたらすということで、「日本人居留民保護」を名目に山東へ軍隊を派遣します（山東出兵）。国民革命軍の主力は北京へ進軍を続け、済南には国民革命軍の一部だけが残りました。その済南に向けて、大連にいた松本連隊の一部も派兵されることになり、500人程度が青島を経て済南に入りました。

済南事件とは、1928年5月3日から4日にかけて日中両軍が激しく衝突した事件です。日本軍が勝手にやってきて、中国軍に出ていけと言っても、そう簡単に出ていくわけがありません。双方が睨み合う中で激突になります。中国側には、一般市民を中心に約3600人の犠牲者が出ました。松本連隊の500人もこの戦闘に参加し、済南の北西の城壁の破壊攻撃に従事します。戦った相手は、国民革命軍の第41軍第3営第9連（営は日本語の大隊、連は中隊に相当）の300人でした。結局、松本連隊は、この戦闘で104人の死傷者を出します。済南事件全体で日本軍が死んだのは、戦死が26人、負傷が157人で合計183人でした。そのうちの104人が松本連隊です。ですから、これは当時、長野県内でも相当問題になったようです。

今、スライドに示したのは、日本軍の大砲で破壊された済南の城門です。この辺を攻撃したのが松本連隊。そしてこれが城壁の上。この辺に中国軍の死体も写っています。

『信濃毎日新聞』の見出しは「松本五十聯隊の殊勲」（『信毎』1928.5.12）。当時のメディアですから、こう書きます。しかし、やがて19人の遺骨が松本駅に到着します。「細雨むせぶ松本驛頭に」という見出しにせざるを得ません（『信毎』1928.5.28）。「出迎への大群衆、黙々と聲を呑む」。初めて本格的な軍隊との戦争になったため、大きな犠牲を出すことになりました。

その後、満洲事変が起きてから、松本連隊は、北満の抗日軍の掃討作戦に従事します。当初、1932年の3月に第一次上海事変の増援部隊として上海に派遣されるのですが、上海に着いた時は休戦となっていたため、満洲に回されたという経緯です。最終的には黒竜江省という、中国の一番北にある地域で抗日ゲリラを抑える軍事作戦を展開していました。この時は1500人ぐらいが派遣されています。

また1933年に日本軍が満洲から華北に侵攻した際は——これは中国で長城戦役と呼ばれるものですが——、ここへも1個大隊約500人が派遣されました。

1937年に始まる日中戦争では、部隊が、五十連隊一つでは足りなくなるので、百五十連隊という臨時の連隊もつくられました。結局、補充を含めると5000人規模に達する部隊が2つ派遣されています。死傷者は両部隊をあわせ、約4000人でした。

華中に派遣された松本百五十連隊（山本部隊）は、南京までスライドに示したルートで行っています【図4】。上海の南の金山から強行上陸し、10日間ぐらい戦闘を重ねながら太湖の南を回って南京に向かいました。南京は、当時の国民党政権の首都で、さきほどの済南と同じように城壁で囲まれていた都市です。20キロぐらいの城壁があります。その東南の一角、雨花門のあたりを百五十連隊は攻めました。雨花門は、鉄道を通すため新たに設けられていた小さな門です。スライドには、この雨花門を破壊し、中国軍を撤退させ「勝ったぞ」と万歳している松本連隊の兵士たちが写っています。

一方、華北に派遣された松本五十連隊（遠山部隊）のほうは、華北各地を転戦していきます。どんな状況であったか。平出一源さんという方が書かれた『遠山部隊従軍日記』（御自分で持ち帰った貴重な日記を1980年に自費出版したもので国会図書館、信大図書館などに所蔵されています）に、「捕虜は新しい兵隊に度胸をつけさせるためもあってか処断させる。無抵抗な相手だけに、いやなものだ」と書かれています。「処断」とは、銃剣で突いたり銃で射殺したりして、捕虜を殺すという意味です。これはもちろん国際法違反です。

その後、少し落ち着いた状態で五十連隊が再び満洲に派遣されたのが、1941年から1945年まで。一般の兵士は岐阜、愛知からの徴募で。将校や下士官のみが信州人でした。一方、松本駐屯の部隊として、新たに百五十連隊が再編されます。そして、この時期にアジア・太平洋戦争が勃発します。五十連隊は南方戦線へ投入され、テニアン島に着いて4カ月半後、米軍が上陸し、全滅します。日本軍の1万1000人ぐらいのうち、戦死9962人、生還759人。五十連隊は、戦死2870人、生還271人でした。それから百五十連隊も南方戦線へ投入され、トラック島へ。トラック島は全滅しなかった。なぜかというと、アメリカ軍が上陸しなかったからです。ただ、爆撃や栄養失調で約830人が戦死しました。留守になった松本には、本部決戦に備え第四百三十九連隊が編成されましたが、これは敗戦により解散しました。

全部合わせて見ると、犠牲になった松本連隊の戦死者の合計は約5000人を越えるほどでは

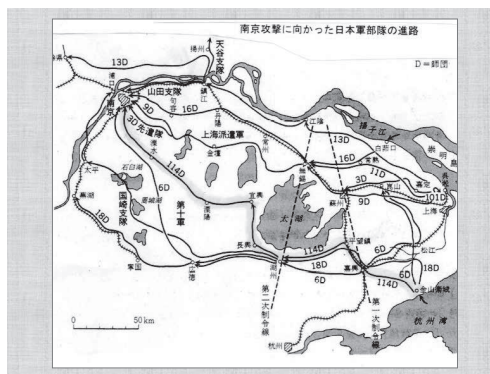


図4

ないかと、私は推定しています。相手国でも、もちろんたくさん亡くなっています。ロシアで8万人、シベリア出兵のときです。山東出兵のときも3600人、市民と軍と合わせて。それから、日中戦争では、中国政府の公式発表では死者2100万人ということになっています。日本軍についていえば、死者174万人。そのうち5000人が松本連隊だったことになります。こういうきつい記録が、松本連隊での記録としてありました。

スライドの写真にある、これが見送り光景。そして、これが遺骨が帰ってきたときです。これが繰り返されます。これを繰り返していたら、もうたまらなくなってくるわけです。これが、信州人が松本連隊を通して体験した侵略戦争であり、それが記憶に残りました。「もう戦争はごめんだ」という平和を求める意識の背景になり、憲法第9条を支持する基盤にもなったといえるでしょう。

ただ、一言、付け加えておくと、侵略戦争の加害体験というのは、語れる方は少ないし、語られる機会も少ない。私はこういう申し訳ないことをしました、ということと言う方は少ないわけです。忘れられていきます。連隊が壊滅した悲惨な体験のほうは、比較的、残りやすい。山本茂實の『松本連隊の最後』という本もあります。それに対し、侵略のための軍隊の記憶は、どんどん薄れていく。これは注意すべき問題であろうと思っております。

済南事件について山東出身の友人に尋ねたところ、今でも5月3日にはサイレンを鳴らし、追悼会を開き、そのことを忘れないようにしています、とのことでした。日本に留学しているほどですから大の日本ファンの中国人ですが、これはこれで忘れませんということですよ。一方、松本で5月3日を記憶している人は少ないし、済南事変で日本軍が出した死傷者の6割が松本連隊であったことを記憶している人はもっと少ないでしょう。あるいは雨花門の記憶も、南京では記憶されるけれども、松本では記憶されていない。この辺も問題になると思います。戦後、日本は、74年間、確かに自らは戦争をしなかったけれども、アメリカ軍基地が存在してきたし、海外派兵につながる動きも存在しています。また中国にも、軍事力に頼った強国化をめざす動きがあります。こういう状況の中、われわれが、侵略戦争の遺構である松本連隊の建物を何らかの形で保存しながら、平和の発信地へとしていくことは、ほんとうに大事じゃないかなと思っております。

胸に刻んでおきたい言葉を二つ挙げました。一つは、大澤さんのこの言葉です。「アジアの人々を殺戮した忌まわしい出来事を二度と繰り返してはならないために、一部でも保存できれば」という言葉。それから憲法第9条です。「正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に希求し、国権の発動たる戦争と、武力による威嚇または武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する。前項の目的を達するため、陸海空軍その他の戦力は、これを保持しない。国の交戦権は、これを認めない」。赤レンガに対する松本市民の思いは、この二つの言葉に通じていると、私は理解しています。記憶というものは変化していきますが、引き継がなければいけない記憶もあります。そういう意味では、こういう機会をつくっていただいたことに、私は大変感謝しております。ご清聴ありがとうございました。

武者 ありがとうございます。松本として戦争をどのように記憶していくかというのは、非常に大きな、重い課題であると同時に、赤レンガを通じて、これをどういうふうにわれわれが進めていくのかという点についても、セッション2の後半のほうの一つの論点になろうかと思っております。

いろいろ議論したいところなんですけれども時間がだいぶ押し過ぎてまして、最後に福島先生のほうで、これまでの赤レンガの歴史を端的にまとめていただいて、ひとまずセッション1は閉じたいと思います。本当はここで1回、質疑応答の時間も取りたかったんですが、予定ではもうセッション2が始まろうとしている時間になってしまっているんです。ですので、まとめの後5分ぐらい休憩を取って、セッション2にいきたいと思います。福島先生、お願いします。

4 セッション I のまとめ

福島 5点ほど、まとめというか、申し上げておきたいと思います。まず、今日お話しした1点目は、松本城の城郭は明治維新の中で、いったん「存城」とされました。先ほどは触れませんでしたでしたが、政府が当面残しておくべき城郭＝存城と、壊すべき城郭＝廃城の二つに分けたんです、明治6年正月に。その存城として、活用しよう判断された。それで、陸軍の管轄下に置かれた。だからこれは複雑な、敷地をめぐる問題を生ずる出発点になったということです。

2点目。しかし、陸軍の分営の設置をめぐる動きが具体化すると、松本城の三の丸までの敷地は狭小であったことから、政府は新たな分営地を確保することになり、桐村に6万坪の軍用地が生まれたのです。そして、連隊が正式の置かれることとなる明治41年までの間、軍用地をめぐる様々な問題がおこりました。

3点目。明治40年に歩兵五十連隊が松本に駐屯することとなり、翌年に入城したが、その敷地は、明治初め以降の軍用地の存在に負う所が大きかった。ここに松本は軍都として「発展」することとなった。

4点目。戦後、連隊の駐屯地は松本医学専門学校、松本医科大学、信州大学医学部、信州大学本部のキャンパスとして利用されるようになり、軍都の象徴であった五十連隊駐屯地は、旧制松本高等学校とともに、学都松本の一翼を担う礎となった。

最後の5点目が、現在信州大学に残されている「糧秣庫」は、数少ない軍都松本を思い起こす遺構の一つであり、大学の遺産であることはもちろん、軍都から学都へと変貌した松本の歴史を語る重要な遺構のひとつである、ということになります。

関連して写真を2、3点見ておきたいと思います。「射撃場橋」っていうのが、旧射撃場跡に行く途中にあります。こまくさ寮の宿舎棟がある所は旧射撃場の跡ですが、そこに向かっていくと、橋の名前として残されています。さらにしばらく歩いていくと、『松本歩兵五〇連隊・射撃場跡』という、地元の城北地区の文化財保存会で作った看板が立っています【写真27】。看板とは言え、射撃場の存在を示す資料としては重要だと思います。



写真27



写真28



写真29



写真30



写真31

これは【写真28】「陸軍用地」と記された石柱です。赤レンガ倉庫の脇に寝かされています。重たいので持ち去られることはないだろうということになっているようですが、保存の措置をとる必要があるのではないかと個人的には思っています。この陸軍用地というのは恐らく、敷地として囲った主要な境界地に打たれたと思います。現在でも打たれている場所があります。こまくさ寮付近の川のへりに、現在も陸軍用地という形で打たれています【写真29】。何気なく残されていますが、非常に重要なものだと思います。これは【写真30】、自衛隊の松本駐屯地に打ち直されているものです。この奥に資料館があって、資料館では連隊関係のいろいろな、兵士の日記だとかそういうものが展示されています。これも、資料としては重要だろうと思います。

キャンパスの中に石柱状の石材があちこちに転がっています【写真31】。この石材がいろんな形で再利用されていたり、駐車場の脇の所に寝ていたりするんですが、これは恐らく五十連隊の建物の土台、礎石ではないか。いずれ、連隊関係資料としては調べなくちゃいけないかなと思っています。

最後に、赤レンガ倉庫の保全のためにご協力をお願いしたいと思います。以上です。ありがとうございました。

武者 ありがとうございました。これでセッション I 「これまでの赤レンガ」を終わりたいと思います。

セッションⅡ：赤レンガのこれから

武者 後半のセッションでは、「赤レンガのこれから」という、一転して今後のことについて考えていきたいと思うんですが、まず最初に人文学部の金井先生のほうから「赤レンガの現在と可能性」というテーマで話題を提供していただきたいと思っております。それでは金井先生、よろしくお願いします。

金井 はい、よろしくお願いします。私は人文学部の芸術コミュニケーション分野というところに所属しております。このプレゼンテーションではおよそ4つのポイントについてお話しします。ひとつめが赤レンガの先行事例の確認。信大の繊維学部、教育学部、そして山梨大学で現在どのような活用がなされているか、確認します。そのうえで、2つめの話題として、芸術コミュニケーション分野が一体どういう形でこの赤レンガと5年ほど付き合ってきたかをご紹介しますと思います。学生が芸術家とともにそこで展覧会を組み上げながら、新しい芸術表現を探求するという活動なのですが、そういった活動において赤レンガがどういった機能を果たしてきたか、あるいは赤レンガがあるがゆえにどういったアート作品が可能であったか、そういったことをお話しします。そうした点を踏まえて、第3のポイントとして赤レンガの可能性について、そして最後に、優先課題を指摘させていただきます。

赤レンガ活用の先行事例

まずひとつめ、先行事例です。繊維学部資料館です【写真32】。繊維学部の前身、上田の蚕糸専門学校は1910年創立。その当時の貯蔵庫です。開校百周年の記念事業ということで改修を実施されたと伺っております。2013年に登録有形文化財になりました。丁寧に保存・活用されている施設です。この建物はキャンパスの中の大変いい場所にどっしりと構えていて、ご覧のとおり、先ほど見ていた松本の状況に比べると、とりわけ建物の周り、レンガのそばも丁寧に整理されている様子がわかりますね。あと、この周囲の植栽もクワの木ということで、要は養蚕とともに歩んだ地域の歴史を踏まえつつ、美観の維持にも配慮しているわけで、先行事例として大変重要だと思います。

内部の利用状況について、こちらは基本的に博物館です。職員の方に詳しくご説明いただ



繊維学部資料館

写真32



信州大学教育学部同窓会赤煉瓦館

写真33

きました。1階は主に上田の蚕糸専門学校以来の学校教育史を紹介するコーナーになっています。2階は生糸を巡る展示で、どういった形で生糸が近世以来作られてきたのか、上田と生糸の関わりがどうであるかといったことを、丁寧に私たちにを見せてくれる貴重な空間になっています。

もう一つ、こちらは教育学部の赤レンガです【写真33】。先ほど福島先生からのお話にあったとおり、非常に古い、師範学校が用いていた建物です。2008年に登録有形文化財になっています。ところが2014年に神城断層地震によって破損しまして。これではいかんということで、同窓会が主に動かれて改修、2017年から信州大学教育学部同窓会赤レンガ館として開館しています。周りの木々もきれいに刈り込まれて、かつて見たときに比べると本当に整えられている。関係の職員の皆さんのご努力を感じるところです。その利用ですが、1階には雰囲気のある会議室が設けられている。そして2階のスペースにはグランドピアノが1台置かれています。コンサート等に用いられているということでした【写真34】。繊維学部、教育学部の赤レンガは、それぞれ文化的な空間へと生まれ変わっているわけです。松本の赤レンガも、こういった流れを引き受けていきたいですね。

もうひとつ参考にした例を。これもやはり福島先生からご紹介していただきましたが、山梨大学の赤レンガです【写真35】。この建物も非常に丁寧に保存、利活用されています。歩兵第四十九連隊の、これも糧秣庫で、300平米、ほぼ松本の赤レンガと同じサイズです。1909年頃から使われ始めたというわけで、時代背景も同じです。この建物は甲府の大空襲を逃れて戦後も長く山梨大学の小中学校の倉庫として使い続けられていたようで、また、卓球場もあったそうです。山梨大でお話を伺っていると、必ず卓球場の話題になりまして。とても親しまれていたのだらうな、と感じました。

ところが、1998年、大雪で建物が相当破損したそうです。で、どうなるかということ、98年という時代を念頭に置いていただきたいのですが、壊れたのであれば、すべて一から建て替えようというのが大学の当初方針だったそうです。ところが、やはり、新築にする、新しくするという話にたいしては、それではいかんだらうという声が、近隣の皆さんから、そして市民の皆さんから広く上がって、一つの市民運動に熟してきたそうです。結果、大学としても考え方を変えて、保存を念頭においた改修、そして利活用ということに切り替えていったそうです。で、これが2002年に完成して、地域の人々にとってのコミュニティー空間となっ



写真34



山梨大学赤レンガ館

写真35

たということです。言い方を変えるならば、改修当初、大学としての具体的用途はそれほど設定されてはいなかったようです。

2002年の改修の後、2006年に登録有形文化財に登録されます。この建物の周りも丁寧に整えられていてよいですね。歩きやすい。松本の赤レンガにまず足りない要素ですね。ライトアップ装置まであるんですね。2002年完成ですから、いろんな意味で国立大学として余裕があったんだと思います。

中に入りますと、山梨県の教育史を紹介する展示コーナーがあり、建物自体の来歴についての説明パネルもあります。素晴らしいことです。松本の状態に比べると、本当に何歩も先を進まれているわけです。

さて、その続きの空間が広いコミュニティーホールになっています。設備としてはスポットライトやピクチャーレールなど、よく整っていて、よい展示ができそうです。それから、しっかりバックヤードがあり、いろんな什器も格納し易い。一部に中2階があって、そこに控え室まで用意されている。つまり学外の方がお使いになることを念頭に置いていたわけですが、これらすべてが約200平米の空間の中で実現しています。非常に構成がいいというか、かっちりしたつくりです。天井の蛍光灯をきれいに隠しているところなど、細かいところですけども、お金をかけて作られていることが実感できますね。さすが2002年の改修です。

利用状況について。総務部の方に伺ったところ、年間220日ぐらいい人が出入りしているということです。当初は学外の皆さんのための施設という位置づけだったのですが、だんだん大学側で赤レンガを使うというムードが出てきた、特にサークルの人たちが、例えばコーラスや軽音の練習場所として用いている。また、隣接する附属学校のいろんな行事に使われるようになってきたということで、非常に稼働率が高くなったそうです。松本の赤レンガの未来を考える上でも、大いに参考になる例です。

以上、各地の赤レンガを見てきますと、博物館的な展示施設に使われていたり、ギャラリー化していたり、あるいはコンサートスペースや多目的ホールになっています。松本の赤レンガの改修後の用途も、概ね同様なところで考えられるかもしれません。

信州大学人文学部芸術コミュニケーション分野の利用実績と、赤レンガの可能性

さて、次に、松本の赤レンガの現状での利用実績についてお話します。私のゼミは毎年学内外で展覧会を行っています。ある年、2014年なのですが、たまたま学生たちが赤レンガを、“発見”し、ここで展示はできないかと言い出しました。ちょうど登録有形文化財になった頃で、学生たちの意識にものぼり易かったのだと思います。その年の9月、ご許可を得て、学生たちとなかを覗いてみました。すると「何だろう、これは」というような雰囲気、重厚感で、学生も、そして私も圧倒されたのでした。

さて、次のアクションですが、ここが最近のアートの流儀だと思っていただきたいのですが、まず掃除を行いました。ひたすら掃除をするということ。掃除をしながら、その場の意味というか雰囲気をつかんでいくということを学生たちと一緒にやってみました。そして、展示の実施。それが2014年。ただ、このときは、医学部の皆さんのご理解、ご協力を得つつ、どこまで何をやっていいのか、学生なりに、あるいは私なりに戸惑いがある、作家さんを巻き込むのは申し訳ないというか、まだ怖いと思って、学生の展示に留めました。中

に入れないということを逆手にとって、変な事件現場のようなものを作った学生もいましたし、あるいはこれが糧秣庫であるということ意識して、ストレートですが、おにぎりを作って、ずっとお供えしてくれた学生もいました。とにかく場の歴史を読み取ることに、学生なりに真剣に取り組んでくれたわけです。それだけで終わると埋もれてしまったのですが、おかげさまでこの展示を、信毎さんが学内の文化財利用という記事にまとめてくれたんです。感謝しています。

それに味をしめたというわけでもないのですが(笑)、今度はもっと空間を生かそうということで、2015年には芸術家の下平千夏さんをお招きして、いわゆるインスタレーション、空間をたっぷり使った展示を試みました。展示をしてわかったのは、建物の経年、古びの美しさというものが、実は作家さんにとっても学生にとっても、大変大きなインパクトを与えたということです。いわゆるホワイトキューブ、白い美術館の壁とは違う、この経年変化の中に、さまざまな歴史の余韻を感じた、向き合う価値を感じたのですね。

そして2016年。この年は学生の中で赤レンガ倉庫の意味を読み直す、しっかり考えるということが出てきました。糧秣庫、食べること、兵士、国、国家、家族、家庭、こういったキーワードがあがり、その流れから、2人のアーティストを招くことになりました。

友政麻理子さんが展示したのは、架空の家族を演ずるというビデオ作品です【写真36】。この画像の右側にいるのは台湾の方なんですけども、左側が友政さん、赤の他人です。赤の他人がお父さんと娘を演じながら食事を一緒に取るのです。そこでどんなコミュニケーションが成立するのか。一体どういった家族の話、共同体が生まれるのか、そういった実験を試みた作品でした。もうひとりの作家、二藤建人さんは、家族を支えることの重さ、共同体のもつ重力などを、非常にダイナミックな映像作品と立体で伝えてくれました。

つまり、赤レンガの歴史を学生と作家さんが読み込んだ上で、こういった作品展示が生まれたのですね。作家さんにとっても大切な展示機会だったのではないかと思います。このときもやはり信毎さんにしっかり取り上げていただき、糧秣庫を生かす作品展としてご紹介いただきました。

そして、今年度は鈴木のみさんの展示を行いました。鈴木さんはものに残された記憶に関心をお持ちなのですが、鏡のなかに普段その鏡を使っている人の姿を焼き付けた作品を赤レンガの一室に多数ちりばめて、一つの雰囲気を作られた。ものが持つ、場所が持つ記憶を私たちはどう受けとめることができるか、ということで、より本質的なかたちで赤レンガの問題にも触れていたように思います。

それからもう一つ、これは鈴木さんが赤レンガのなかに設置されたいわゆるカメラ・オブストラ、ピンホールカメラです。附属病院の建物も見えています。赤レンガ倉庫の周りの、つまり今私たちが生きている空間が、この赤レンガの中へと降りそそぐというアートです。



友政麻理子 展示風景

写真36

現在と歴史が一つの作品によって交差していくのです【写真37】。

ところで、この展示の際、年配の女性がいらっしゃって、ゆっくりと建物のなかをご覧になっていたのですが、何か手に持っておられたのです。実はそれはお父さまのご遺影でした。五十連隊に所属されて戦死された方でした。そのお父さまが出征されたときの写真を持って、この建物をぐるっと回り、作品も丁寧にご覧になりました。写真の強さと歴史の重さを感じ、私の心は大きく揺さぶられました。赤レンガを開けば、そこに拠りつつ記憶をたぐり寄せたい人が訪れるのです。大切なことではないかと思いました。赤レンガを生かすということ、その実感が私なりに強く感じられた出来事でした。

というわけで、もう話を終えなければなりません。赤レンガの可能性ということで、ここまでの話によって、芸術的側面、歴史教育の側面、地域・共同体との関係など、お示しできたと思います。古い建物は作家さんにとって刺激的です。また、歴史を見つめる現場になります。そしてみんなが思い出を抱えて集まる場所になります。丁寧な改修によって、アートにかぎらず多様なコミュニケーションの現場として赤レンガが息づくことを願っています。

優先課題

さて、最後に優先課題ですが、とにかく、建物の周りは何ともしないとまずいだろうということ。それから、現状、雨どいが塞がっていて水が溜まる。雪が積もるといっそう屋根に負荷がかかって、壁や天井も傷めてしまいそうです。私、この赤レンガに毎年入らせてもらっていますので、建物の傷み具合の変化を感じています。できることから解決していきたいです。

というわけで、最後に、学生たちがやったかわいい企画をちらっとご覧いただき、話を終えたいと思います。赤レンガ前のおでん屋台です。なんだかよく分かりませんが（笑）、こんな持ち寄りパーティ的な雰囲気が赤レンガを包んでいけば、とても感じのいいキャンパスになるのではないかと考えております。以上です。

武者 金井先生、ありがとうございます。いろいろ各地でリサーチもしていただいて、松本の赤レンガの現在地がよく分かった気がします。それからやっぱり、アートの力というのをまざまざと見たような感じがします。おでんも含めてです。ありがとうございます。

引き続いて、今度は工学部の土本先生のお話に入りたいと思います。土本先生は、将来の活用プランということで、幾つか具体的な絵も例示いただきながら説明いただけることと思います。先生、よろしくお願ひします。

土本 ご紹介いただきました工学部の土本と申します。私は、専門が建築史で、建築の歴史をやっています。それに加えて、建物の保存とか再生をやっております。信州大学に来ましたのが1993年4月で、その夏に松本市内の民家とくに本棟造を調べました。その1993年の12



鈴木のごみ 展示風景

写真37

月に大河直躬先生が信州松本に来られて、レンガの建物を調査されて、取材を受けるということで、私は実測調査のお手伝いで学生と一緒に松本に参りました。

野球場だった北の辺りにレンガの建物がありまして、これは5年ぐらい前に書いた絵で、地元の設計事務所さんに清書してもらったものです【図5】。1993年暮れにレンガの建物が壊されるということを伺いながら実測調査しました。そのとき私は、戦争遺産という点とか、医学部の営みがどうであったかという点は全然知らずに調べていたのですが、本能的に古い建物を保存したいというつもりだったので、レンガが壊されるという話を非常に残念に思っておりました。

信州大学では、キャンパスマスタープランというのを大学で作ることが許されるようになったのが独立行政法人化になってからのことでした。十数年前の最初のマスタープランではミクロスの森という建物があったのです。ここはいつまでも駐車場になってしまっていて、あまりいい感じではありません。だから、ここから車を出したいというのが基本的な目的で、そのために絵を描いてくれということで、施設部長さんに頼まれて描いたのが5年ぐらい前です。その後、マスタープランも書き直しました。

特にレンガの建物は遺したいと思っていました。そのための手法は幾つかありました。まず文化財として保存することです。こういう観点をキャンパスマスタープランの中でも位置付けたわけです。

教育学部のレンガの建物も登録文化財にすることができ、繊維学部のレンガの建物も登録文化財にすることができました。キャンパスマスタープランを、私が最初に担当させていただいたときに、施設部さんがお持ちだった資料など見ながら全キャンパスを歩きました。例えば繊維学部のキャンパスの図面を見ますと、建物が建てられた年代が図面に書いてあったのです。その年代が意味するところは、古いものをどんどん壊して行って、それで建て替えていくという、そういう国からの施策の方針を反映したものであったと理解しました。それで、キャンパスマスタープランでは、繊維学部の方々から合意も得て、歴史的な建物を保存するという形でマスタープランに書くことができました。それで、幾つか繊維学部の中で建物が遺るきっかけがつけられたかと思います。

去年ぐらい、保存されたレンガ建物の利活用について提案してほしいということで相談にあずかりました。取りあえず図面を書き始めたんです【図6】。といいながら、清書しよう

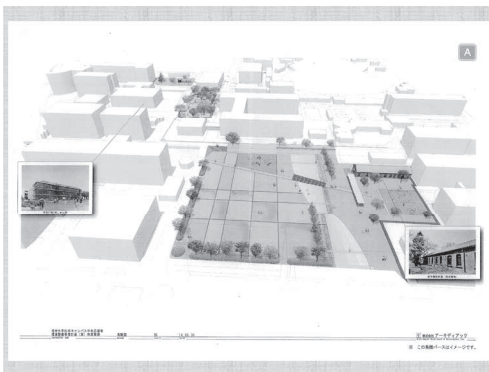


図5

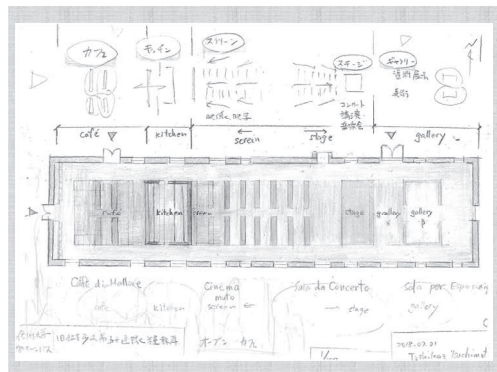


図6

かなと思ってやめたんです。

どんなふうに皆さんと価値観を共有して進んでいくのかということなしに、図面だけ暴力的に出ていくというのもどうかなあとかいろいろ思いながら、筆をとめました。だから、きょうの1日は、本当にいい未来を建物に対して与える上で、非常に重要な意見交換といえますか、価値観を共有するというか、いい方向での未来を見る上で大切なことなんじゃないかと思います。

建築の設計に関して申し上げますと、建築の学生は工学部で、信州大学もまさにそのとおりなんですけど、大学に入って図面を書くんです。設計図を書く。それに大量の時間を費やすので、図面書ける人になるということが建築学科の目的の一つかもしれません。それで、そのときに建築が機能的であるとか、社会的責任を持つとかというような側面ももちろんあるんですけども、やっぱり一つの作家としての個性を出すというところに対して、どれくらいオリジナリティーがあるのかということが問われている気がするんです。例えば文化財で世界文化遺産がル・コルビュジェの設計である国立西洋美術館が東京の上野公園にあります。それはくっきりと時代性と個性が出た作品です。

しかし、私の学んだ研究室は真逆の方向で、建築の歴史研究とその保存をやっていたので設計はしないんです。私は研究室に所属したとき稲垣栄三先生に対して私は設計にも興味ありますと申し上げますと、「君は研究をしたいのか、設計をしたいのか、どちらか」とおっしゃるんです。これは今思えば間違った御質問だったと思います。

建築を、今のように古いものを大切にすることが求められているときには、保存的な学術情報が必要ですが、同時にデザインがなければいけない。デザインしないから壊されるというか、建物がなくなっていくのです。提案力がないと、そのままさら地にされちゃうのです。逆に、保存に関して、いい提案があれば、そっちのほうでも考えましょうというふうになる可能性が出て来るということだと思います。

高度成長期は、保存と開発の二項対立の中で、それで一方では一生懸命に建物を造りながら、一方では壊していくということでした。一方のほうでは一生懸命に石を積んでいるけども、一方のほうでは一生懸命に石を崩しているというようなことがあったということです。古いものと新しいものとを統合するという、この調和的なことが本当は一番求められていたはずなんです。そういうときに、どういう考え方で建物を位置づけるべきか、あるいは提案すべきかということです。私は、沖縄で首里城復元の仕事をやっていたときに、デザインしないデザインをデザインするというのを何となく想いつきました。

建物が本来持っているものを声としてたくさん聞いていって、一つ一つの柱とか、先ほどの壁、金井先生に見せていただいた壁のペイントがちょっと剥げているようなところがありますよね。そういうところの作った人の手が、素材や形として遺っていて、それが劣化しているものを人々が、例えば年老いていったときに、顔に個性が出てくる、生まれたときだと、赤ちゃんかわいいですね、ということになるけども、年を取れば取るほど個性を持つというような、そういう古いものに対する一つの愛着心を持って臨んでいくということだと思っています。建築家の思い入れによる独断的なものなるべく付加しないという手法を採るべきであると思っています。

このことについて、信州で一番勉強になったのは、私が助手のときに非常勤で設計製図を

教えていただいていた降幡廣信先生の民家の再生の考え方です。降幡先生は、自分に師匠はいないというふうにいわれているようですが、お弟子さんの川上恵一先生によると、民芸から影響を受けている点があって、地元の松本民芸から影響を受けているというのを聞いております。降幡先生は、自分を出すというような自己主張を極力否定しておられ、自分の主張がない建築に対してどれだけの自信が持てるのかというところが肝です。

レンガ建物は遺された一部が、現在、登録文化財です。さらにしっかりと調査をして、それで建物のどこが傷んでいるか、傷んでいないかとかということ調べるのが大切です。いきなり工事に着工するんじゃなくて、まずしっかりと調査する必要があります。登録文化財にする上で、簡単な図面は取っていたわけですが、建築の構造でどのくらい持つか持たないかというところがあります。特にレンガの建物は地震に対して挙動が難しいので、しっかりと扱う必要があるかと思えます。そして、その調査をちゃんと記録して行って、それでどのように変えるか、変えるところを変え、変えないところが出てくるかと思えます。

それで、登録文化財の場合は、所有者との信頼関係の中で、かなり保存しながら使っていくということが前提になっておりますので、特に外観、こちらの外面をきれいに遺して、そして構造となっている壁とか梁、木の梁とか棟木などを遺していくと、内部のほうはかなり自由度で造ることができるだろうということがあります。

それで、カフェということを考えました。ここでカフェを出して、ここで飲むといっても、ちょっと足りない感じがあります。パソコンでも置いてコーヒーを飲むといっても、孤独なだけども孤独じゃないというような世界を作っていきたいと思いました。それで、イタリア語の辞書を用いて、イメージを膨らませました。学生の居場所が必要ですので、私は今ここにいるよというようなことがいいんじゃないかということです。その場合、コーヒーを飲む必要もなく、ここにいるよということだけで十分です。

というわけで、ここはレンガの建物ということで、Caffe di Mattone と記しました。Mattone (マッtone) というのはレンガという意味です。Caffe di Mattone で、レンガのカフェになります。この Mattone を電子辞書がしゃべると、「待ってるね」というふうに聞こえるので、これを Mattone プロジェクトとあって、このような案を作りました。

このスクリーンもいい感じです。真ん中には、ほんやりと長椅子があって、こっち側に向かって座ってもいいし、あっち側に座ってもいいという感じです。こっち側に座ると、ここでちょっとステージあってもいいし、きょうみたいに平場でもいいんです。ここを、中心に据えて、小さなゼミとか講演ができます。あっち側に座ると、スクリーンが見えます。映像でずっとスライドで流しているのも、漫然と流していってなかなか面白いんじゃないかなという気がいたします。

戦争遺産というか、戦争遺産ではないですけど、満蒙開拓平和記念館が阿智村にできて、2、3回行きました。素晴らしいです。建築家の新井優さんが頑張って造られたということで、南側にまた増築されると計画があります。満蒙開拓平和記念館では、きょうの話題となった満州での悲劇が、肉声とかビデオとか書き言葉とかで展示されたりしています。松本キャンパスのレンガもそういう感じの映像をながしてみるか、あるいは、そうじゃない映像も流してみたいかと思えます。

それで、このギャラリーでこうなって、ここをふさげばここが倉庫になるみたいな、もう

ちょっとしっかりと設計しなきゃいけないかなあというところを考えております。これで、ギャラリーの反対側にカフェみたいなことをやって、ここに座って使えるというようなところを考えておりますけども、もっとしっかりと描く必要があるかと思えます。

建造物の保存をという点でイコモス ICOMOS という国際的な団体があります。このイコモスの出発点は第2次世界大戦による惨禍にあって、国際紛争等で古くて貴重な建物が壊されてしまったとき、それをどうにかしようという協力が国際的な環境の下で進められてきたのです。世界文化遺産もその考え方に則っています。というわけで、私は久保先生がおっしゃられた最後の二つのメッセージ、つまり、一つ目は戦争から帰還された方の証言、一つはわれわれの法律の重要なところの平和です。その双方において、われわれは、このレンガの建物を保存するということこそが平和であり、そこに平和への願いが込められている、というふうに考えたいと思えます。

以上です。どうもありがとうございました。

武者 土本先生、ありがとうございました。先ほどの金井先生はどちらかという実践面からの利活用のお話で、土本先生のほうはどちらかという建築あるいはランドスケープの面からのお話でした。土本先生は淡々とお話しされるんですが、その中でも建築やデザインが持つ力に対して、すごく抑制的に考えていながらも、一方ではすごく信じているような部分があり、すごく印象的だなと思っています。

先ほど土本先生も、まだ図面化はしないと。清書はしないと。そういう価値観をここで共有してからだというお話がありましたけれども、この後全体討論の中で、まさにその価値観を共有していくというプロセスを少しでも踏めたらと思っています。本当は会場の皆さんにももっと関わっていただきたいんですが、なかなか質疑応答の時間が取れずに申し訳ありません。もしできれば、また後で取りたいと思っております。

ここで、プログラム上は5分休憩になっているんですが、特になければそのまま最後の全体討論に入りたいと思えますが、よろしいですか。

コメンテーターによるコメント

ここからは、発表者の5名の方に加えて、コメンテーターの4名の方に加わっていただく時間になります。先ほどお名前だけご紹介しましたが、コメンテーターの方に順番にあらためて、自己紹介を兼ねて、ここまでのところの感想あるいは発表者に対する質問、ご意見等をお話いただければと思っております。笹本先生の側から順番にお願いしてもよろしいですか。

笹本 みなさまのお話を大変面白く聞かせていただきました。恐らくこの前にいる中では、私が一番信州大学とのつながりが古いと思えます。というのは、昭和45年（1970）に信州大学に入学したからです。先ほど福島さんの使っていた70年のあの絵・スライドの風景を実際に見ています。私は1年生の時にこまくさ寮にいました。こまくさ寮から理学部の横を通って教養部に通っていたのですが、当時はまだ国立病院が現在の人文学部の位置にそのまま残っていたのです。ということで、必然的に私は赤レンガ倉庫の横をいつも歩いてたわけです。その私が、たまたま信州大学に就職することができ、信州大学で32年間、本来なら33年のところ1年早く辞めたのですが、奉職しました。学生時代を含めると36年間の信州大

学とのつきあいです。辞める前に赤レンガ倉庫の保存と直接関わりました。登録有形文化財にしたのは、私が副学長をやっているときでした。私は何とかこれを残さなければいけないと考えていました。先ほど何人かの人から話が出てきましたように、これより先に多くの赤レンガ倉庫が壊されたとき、私は直接保存運動には関わっておりませんが、文化財保存の観点から大きな挫折感を覚えました。そして、壊された倉庫のレンガを多くの市民の皆さんが拾いに来ている状況を見ながら、まだ壊されていない建物については何とか残したいと切実に思いました。その後、私はたまたま副学長になりましたので、大学全体の文化財をどのように見たらいいだろうかということで、2013年に『凜 信州知の森の文化資産』という図録を作りました。各学部に行きますと、すばらしい文化財がありながら、それが放置されたままになっていて、大学としては全体像をつかんでいないという状況だったのです。それで、山沢学長に何とかこういうものを作りたいとお願いし、まとめたのです。でも、文化財というのは芸術品だけではないのです。私は建物も残さなければいけないだろうと考え、残っている歴史的建物を残すためにはどうしたらいいのだろうかということで、登録有形文化財という道を考えました。私は現在も山梨県文化財保護審議会の委員をつとめています。文化財保存の方法についてもある程度情報を持っていたのです。「構内に建造物の文化財もないような大学でいいんですか、赤レンガ倉庫は登録有形文化財になりますよ」と役員会などでお願いして登録文化財化をすすめたのです。

そのときに、きょう来ていただいています広報室の伊藤さんたちと共に外観のチェックをしたり、ツタの絡まっているのは建物の保存上よくないので、それを取ったりしました。そして、きょう福島さんの話に出てきた、倉庫内に入っていた他のものも全部チェックしました。文化財登録は市のほうから書類を提出しますので、松本市さんの協力を得ました。文化庁の人たちにもいろんな形で建物を見てご相談しました。当然他の建物も見たのですが、大きく後世の手が入っていて、明治のものかどうかははっきりわからないということで、これだけにさせていただきました。赤レンガ倉庫以外の建物の可能性について論議し、指定できるものは現在指定されている建物しかないと判断したのです。そういう意味で、皆さんの今までのお話は、私にとっては重要な自分の個人的な経験と、それから大学での副学長としての公的な役割の経験、これらと社会全体をどうつないでいくかという両側面から、大変刺激的な話でした。ありがとうございました。

濱田 学長の濱田です。先ほど、土本先生にお願いをされましたが、多分、学内でキャンパスの中心地域を駐車場ではなくそうというのはコンセンサスが取れている話で、ただ駐車場をなくすためには別に駐車場を作らなければならないので、別の駐車場をつくるのを今待っている状況です。実はその計画は既にありまして、最初は先程述べられたキャンパスの北の方にあるグラウンドのある場所に造るという案でしたが、それは反対が大きかったので、今別のところに予定をしています。何がネックになっているかだけ、この際なので申し上げておきますと、実は信州大学が今ある地域というのは、住宅地指定されているので、高さ制限が厳しい場所になっています。キャンパスの中央部に駐車している車を全部入れて、もうちょっと余裕を持たせるためには、4層の立体駐車場を造らなければならないので、それだとしても松本の規制で示されている高さ制限を越えてしまいます。もう一つは容積率制限もかなり厳しいということです。私がなぜそんなに詳しいかというと、イオンがあの高さで

駐車場を建てることができ信州大学では建てるできないというのを疑問に思ったことです。どう見ても信州大学の周りよりもイオンの周りに住宅が多くあると思っていたものですから。それで調べてもらうと、イオンのまわりは商業地指定なので、倍ぐらいの高さ制限になっているとのことでした。その規制の関係を今整理していただいているところです。それがちょっと遅れている一点の理由です。

それともう一つの理由は、今皆さん御存知のように、東京オリンピックの関係で鉄骨がないといわれておりました、建設費用が今建てると非常に高くなります。そのため、来年2020年に行われる東京オリンピックが終了した後に駐車場を建てる計画になっております。松本市が規制を変えてくれるということが大前提ですが、計画通りに新たな駐車場ができると、キャンパスの中心地域は整備できると思います。ちょっとまだ時間はかかりますが、計画ではそういうことになっておりますので、またぜひ皆さんに応援いただきたいと思っております。

武者 ありがとうございます。次、小内さんお願いします。

小内 信濃毎日新聞の松本報道部で記者をしております小内と申します。3月下旬に3回の連載で、赤レンガ倉庫の関係の記事を書かせていただきました。取材をしていて非常に感じたのは、一つには体験された兵士の方々がもうほとんどいないことです。10年ほど前は同じ五十連隊の関係の企画記事を別の記者が書いているのですが、そこでは元兵士の80代ぐらいの方々がずらっと出てくる。今は同じような記事を書こうとしても、ほとんどで不可能という状況にあります。ですので、五十連隊や戦争の歴史を今後記憶としてとどめていくために、赤レンガ倉庫の価値というのは非常に高まっているというのを、取材をしている方々にもお声を聞きましたし、私個人としても強く感じました。

もう一点、今後の保存に向けてという観点で考えさせられたことがあります。文化庁によると、登録有形文化財は全国で1万以上ありますが、それが登録されてから190件、昨年11月までに取り壊されている。今、ここにいらっしゃる信州大学の教員の方々のように保存に向けて非常に強い意志を持っていらっしゃる方も多いですが、そうした状況が未来永劫続くかどうかは分からない。場合によっては、赤レンガ倉庫がさらにぼろぼろになったら、これはもう解体してもしようがないということになってしまう可能性は決して否めない。今後、今回のシンポジウムが起点になるかとは思いますが、赤レンガ倉庫を保存や活用するというのを、どういう組織体で意思決定していくのか、その組織形成というのが非常に重要になってくるのかなと思います。信州大学はタコ足キャンパスとも呼ばれ、意思決定やさらに突っ込めば保存にかかるお金の話の面で、合意形成をするのは難しい側面があるかとは思いますが、その辺りの話に関してもきょうのセッションで少し皆さんのお考えをお伺いできればと思います。ありがとうございました。

武者 引き続き赤羽さんお願いします。

赤羽 先ほど個人的な体験をお話ししましたが、私としても大変この建物に思い入れが深く、保存についての皆さんの熱い思いもきょう感じさせていただきました。私は今教育委員会におりまして、松本市全体の文化財等の保存活用という視点から言えば、きょうは特にこの糧秣庫について多くを語られたわけですが、点としての糧秣庫からさらに、特に松本市の北部、旧開智学校から始まりまして、重要文化財の市の高橋家住宅とか、県宝の

橋倉家住宅、それから浅間温泉の松門文庫等も含めて、そういう北部の文化財の回遊性の創出の中に、ぜひこの糧秣庫も入ることによって一層の魅力が増すと思っています。ですので、そういう視点からもぜひ一緒に考えていけたらいいなあと思っていますので、私たちも仲間に入れてさせていただいて考えていければと思っています。

武者 ありがとうございます。今4名の方の感想をいただきました。赤レンガを巡る論点はいろいろあると思うんですが、最初に考えたいのは、先ほど久保先生のお話にもありましたけれども、やはり松本として戦争の記憶というものをどうやって受けとめていけばよいのかという、歴史的な視点がまずは気にはなるところかと思います。このあたり、笹本先生は歴史学の視点として、やはり最初に登録有形文化財としてここを位置付けた経験も踏まえて、どのような歴史としての伝え方があるか、お話しいただければと思います。

笹本 様々な方法があるだろうと思います。まずは建物を実物としてきちんと残さないと、映像だけでは忘れられてしまいます。これをどういう形で残すかによって将来は全く違ってきます。ちょっと論点がずれるかもしれませんが、課題として感ずることの一つが信州大学の公共性の問題です。昨年私はアメリカのミシガン大学へ教えに行ってきたのですが、ミシガン大学の中には市民がごく当たり前に入ってきていました。美術館でも博物館でも図書館でも、普通に入ってきています。聞いてみると、「州立大学としてパブリックの大学である以上、市民が来るのは当たり前でしょう」というのです。それに対して国立の信州大学はどうでしょうか。現状ではまだパブリック性が弱いだろうと思います。きょうここで、こういう形で市民と協議していくことは、パブリック性を強める第一歩になることでしょう。つまり、信州大学の歴史は大学だけの歴史でなくて、地域社会の歴史であり、日本全体の歴史であり、世界全体の歴史につながっていくのです。そういう発想でいったときに、赤レンガ倉庫を通してみんながどれだけ勉強できるかが大事です。勉強していくに際して、信州大学に信州大学資料センターなるものができたことを、私は大変喜んでおります。つまり大学の歴史をきちんとつかまえようという動きが大学側で始まったのです。同時に市民、それにきょうは松本市の赤羽教育長がおみえですので、市と共に一緒になって学んでいったら、はじめて糧秣庫を通して地域から世界にいたる歴史が見えてくるはずですよ。そうすると、将来の保存のあり方、赤レンガ倉庫の中の整理の仕方も、市民と協賛・協力してやったら、従来の大学の建物保存と違う形の面白いものになるだろうと思います。

私は信州大学で地域戦略センターという地域連携の部署の責任者を勤めていました。その当時信州大学は、何年も続けて日本で一番地域連携をやっている大学だという高い評価を受けていました。でも、ふと考えてみると、市民の皆さんとの距離はまだ遠かった。それが、こういうことを通して近くなり、さらに市民に対して大学はもっと学問的な提供の場を用意していけば、地域連携がさらに進むだろうと思います。私は今県立の歴史館の館長を仰せつかっていますので、市民のために、県民のためにということをお前提にして働いています。県民の税金で生活している私たちとしては当然のことながら県民への奉仕が義務です。国立大学で働く人は、国民の税金で生活しているということを常に意識すべきです。一方で、信州大学があることによって、市民はどれだけ豊かになっているかということをお訴えかけましょう。出前講座からはじまって、信州大学は様々なことを市民に提供しています。大学病院があることによってこの地域の人は大きな恩恵を受けています。病院だけではなくて、精

神的な部分でも大学の存在意義をきちんと訴えていかなくてははいけません。市民の信州大学に対する理解が深まれば、教育長もおいでですから松本市と信州大学が共に手を携えて、様々な事柄に対処することもやりやすくなるでしょう。そうすると、必然的に赤レンガ倉庫の保存資金も大学だけでやる必要はないだろうと思うのです。これはみんなのものだ、みんなの歴史遺産だという認識がはっきりしてくれば、パブリックな大学の中における市民共同の場としての建物に育てるためには何を努力したらいいのか見えてくるでしょう。先ほどの土本先生の案は非常に面白かったのですが、出てきたのは基本的に学生の話でしかありませんでした。これがもし市民共同になった場合にはどういう絵が描けるのか、そういったことをいろいろ考えるためにも、きょうの場が第一歩になればいいなと思いました。

武者 はい、ありがとうございます。実は大学の公共性というのは、この後にもう一つ論点として考えていたところで、先にまとめていただいてありがたかったんですが、私自身、まちづくりが専門でいつも思うのは、やっぱり大学はもっとまちに開いていかなければいけないということです。おそらくここにいらっしゃる先生方もみんな思っていると思うんです。そのために赤レンガができることはいろいろあると思うんですが、赤羽さん、どうでしょう。教育の視点から言えば、赤レンガは平和教育というところが一つポイントになると思うんです。先ほどのお話の中で回遊性というキーワードも出していただきましたが、それと合わせて、やはり赤レンガには平和教育としての可能性というのはあるんでしょうか。

赤羽 今、平和教育の話が出ましたけれども、松本市でも平和学習、平和への取り組みというのを大事な施策の柱にしています。例えば松本市では文書館でも平和教育に関する資料等の展示をしていますし、中央図書館でもやっております。今後は里山辺にあります今まで山辺歴史民族資料館とっていた施設が、旧山辺学校としてリニューアルしますが、そこにも平和コーナーというような資料展示を考えております。市内のそうした取り組みをつなぐ一つとして、この糧秣庫がこの松本の歴史、平和への取り組みをさらにもう一つ、もう一步深く、今お話した3カ所は資料展示の形になるわけですが、実物が語る力というものをぜひ回遊性の意味も含めて重ね合わせできたらいいなと思っています。

また個人的な話ですが、私の父は大正2年生まれで、五十連隊に入隊して、千葉の方へ全部で行って、そして5人ぐらいが連隊長付きの伍長かなんかだったものですから残って、その他の人たちは全部南方へ行って戦死している、そういうことをおやじから聞きました。終戦を千葉で迎え、その連隊長と一緒に帰ってくるわけですが、連隊長は甲府の方でしたので、馬に乗って帰ってきて、最後に別れるときに、うちのおやじに、馬をやるか、毛布をやるか、どっちかを選べと言われて、うちのおやじは毛布をもらって帰ってきたんです。そして私の記憶では、死ぬまでその毛布をおやじは使っていました。今でもその毛布はうちにあります。物置に取ってありますけれども、やはり戦争というものは、うちのおやじにとって何だったんだろうかということをいまだに私は考えることがあります。ですので、平和という視点、松本全体としても平和という視点において、ぜひこの糧秣庫というこの建物の語る力を、私たちはもっと大事にしなくてはいけないなということであらためてきょうは考えさせられました。

武者 そういう形あるものとして戦争の記憶を残していく、そのための赤レンガという視点ですね。これは例えば、久保先生。先ほど「考える会」はまだあるというようなお話もあ

り、小内さんからも、どうやって組織として動かしていけばいいのかというようなお話があったんですが、今の赤羽さんのような取り組みを何らかの会という形で、考える会かどうかは分かりませんが、何かつないでいく、運動としてつないでいくきっかけはどこにあるんでしょうか。

久保 四半世紀たちましたから、新しい局面で考えることになります。その新しい局面の一つは、最近、松本に非常に多くの外国の方が見えていることです。そういう外国の方々と私たちとが、戦争と平和の問題を一緒に考え話し合える場というものを設け、記憶を共有していく、そういう方向性が大事ではないかという気がしています。

日本で軍都として名高かったのは、日清戦争の時に大本営が置かれた広島でした。その軍都に原爆が落とされたわけです。広島の平和資料館は、なぜ広島がそういう大きな被害を受けることになったかという経緯を踏まえた展示になっています。その結果、オバマ米大統領が来るような状況になっていくわけです。こういう方向は、今世界全体でも共有できると思うので、そんな展示をスクリーンやタッチパネルで示したり、平和の問題についての集まりを、先ほど土本先生の言われた空間で時々開いたりするのもいいと思います。その場合、当然英語とか中国語だとかハングルの説明も必要になるでしょう。大学の関係者と市民とが時々相談する場があってもいいと思います。現実問題としてどういう集まりが一番有効か考えていく必要があるのではないのでしょうか。以上です。

武者 今言われた記憶を共有するような機能を、赤レンガにどのように持たせていくかという点で、土本先生。先ほど出されたようなマスタープランの中に、考え方として外に開いていく、いろんな人に開いていくというような考え方もあるんでしょうか。

土本 開いていくというか、誰でも中入れるような感じで、イメージしていました。ただし、学生に比重を置いていました。笹本先生のおっしゃられたように、皆に対してオープンであり、人々がより良く集まる場所という開放性が求められていると思います。

武者 なるほど。それからもう一つの「組織」について。もう四半世紀たったわけですね、考える会ができてから。そういう意味で、また新しい市民との運動や活動を構想していかなければいけない時期に来ているという感じがします。一方で、小内さん。メディアとしてわれわれが期待したい部分というか、メディアの関わり方というのも時として強い味方になると思うのですが、信毎は先ほど発表の中にもありましたが、戦争を伝えてきたメディアとして、これからの時代、信毎としてできること、関われることはあるのでしょうか。

小内 私は信毎の一記者で、意思決定ができる立場ではないので、個人の意見としてお聞き願えればと思います。今回この記事を書くために、過去の信毎の記事を読みあさって感じたのは、やはり新聞報道として記事を掲載する行為は、常にニュース性というものが問われてくる。新しい話、もしくは注目を集める話であるから記事はニュースとして皆さんに読んでもらえるということ、それが大前提です。つまり、どうしてもこういった保存の運動や遺構を残そうという動きは、最初に大きく「遺構が取り壊される」「保存の運動の機運が高まっている」という記事が1回出た後は、そこから展開がなければ記事にはしづらいというニュースの背負う宿命があります。それを継続的に、例えばこういった保存活動の機運が高まったが、またしばみつつある、といったように小さな動きでも捉えてつぶさに取り上げれば、記事としては成り立ちますし、ある種記者一人一人の問題意識の持ちようだと思います。

す。こういった手前、私も今回のこのシンポジウムで機運が盛り上がったという記事を書いているので、例えば1年後に機運がしぼんでしまった、もしくはさらに発展しているという記事をもう一度書くというのが、記者としてできることなのかなと考えています。

武者 心強いご意見でした。まさにそういう機運やアクションから、もう一度市民運動が形成されていくのだと思います。その中でやはり重要なのは、先ほど笹本先生から学びが必要だというお話もありましたが、福島先生。これからもう一回、大学と市民と一緒に学んでいくときに、大学の中に参照できる資料はまだまだありそうですね、先ほどの発表を聞いていると。

福島 この仕事に携わせていただいて約2年になりますが、最初は私、信州大学の出身ではありませんが、出身は松本ですので、高校までの生活の中で、信州大学はある意味で日常的存在でもあったわけです。そんな漠然とした「親しみ」を前提に、あらためて大学の歴史をひも解こうと思ったときに、率直にとってどこにまず依拠したらよいかということでした。そこで、よるべき資料で一番頼りになったのは医学部の25年史です。それはしっかりと、いろんなスタイルで中の文章があって、思い出的な文章もあるし、いろいろあります。ただ、その思い出的な文章というのは、要するにオーラルヒストリーの分野になっちゃうので、その元のデータを探し始めると、途端に根拠がわからなくなってしまうのです。正門の位置がどこにあったか、現在の大学のどこにあったかということをやするのに、施設部の方をお願いをして、そうしたら今の正門の設計図が残っているということが分かって。その設計図を見ると、どういうふうな感じで今の場所のどこにこう、古い門がどこにあってと分かるんです。だから、後々そういうことが必要になるものであることが明確であるならば、今からちゃんと残しておくべきだということをつくづく思います。これはもう絶対必要だと、取りあえず大学の中だけに限って言いますと、大学の歴史を語るときに、今やっているこの仕事は残しておくべきだという、それはやっぱり残しておかないと、あと30年後に100年を迎え、150年を迎えていくときに、そのときに重要な歴史的建造物というのが生まれているかもしれないです。今たまたま五十連隊のレンガがそういう役割を今担っているわけです。もしかしたら、違う建物がそういう役割を担わなくちゃいけないような、あるいは違うところがそういう役割を担うような可能性もあるじゃないですか。そうしたらそれを押さえるためには、何でも残せばいいというわけじゃないですけど、そういうデータを残すという努力を意識的にやっていかないと。考古学は地面の下を掘ろうとしたら、徹底的に調査するわけです。ところが地面の上にあることというのは、ほとんど何も残らないというか、放っておけば。だから、地面の上のことも少し残したほうがいいんじゃないかなっていう感じを強く思います。

武者 なるほど。そうすると、赤レンガの場合は、いまだ医学部のほうが所管ということですが、医学部にはその25年史以外に何か残っているものはあるんでしょうか。

田中 25周年史以外ですと50周年史になりますが、それほど新しい情報はなかったと思います。話は変わりますが、今日、皆様のお話を聞いて感じたのは、赤レンガ造りの建物の話は、医学部にとっては思い出話だと思います。それを日本の平和、世界の平和に結び付けるという発想は、医学部にはあまり無いだろうと思います。それを有意義に結び付けてくれるのは人文学部の先生方の詳細な調査によるものであり、このパワーには非常に感心しました。この結びつきが無ければ発展性はないのだろうと感じつつ、このシンポジウムに参加し

て良かったと思っています。

武者 ありがとうございます。そういう意味では、大学でも部局が横断的に取り組んでいかなければいけないことだと思います。特に人文学部の先生方はいろいろやっていただけることが多いと思いますが、金井先生どうでしょう、これまでもいろいろな取り組みをされてきたと思いますが、今後の展開の可能性として、もし何か考えておられることがあったらお聞きしたいのですが。

金井 はい。皆さんのお話を伺いながらますます横断的であることの大切さを感じたところですが、その観点で申し上げますと、たとえば、学芸員資格を信大の人文学部、理学部、工学部、史資料センターが協力して出しているということは、今後もとても重要だと思っています。そこには文理のつながりがあります。そこに赤レンガも関わっていくとよいですね。例えば、赤レンガが博物館的な施設として、学芸員教育の現場となり、理学部の自然科学館とつながることによって、松本キャンパスに一種の博物館群が形成されるとか。大学博物館として、歴史・記憶の継承もするし、自然科学系の調査研究展示も徹底的にやる。そんなフレームがしっかりできると、学外の人にも訪れやすい松本キャンパスになりそうです。

もう一つは、赤羽先生や笹本先生がお示しになった話題なんですけれども、地域と松本キャンパスをどうつなぐかということです。学内に人が来るようにする。例えば赤レンガと松門文庫をつなぐ方法を考える。これは本当に重要なことだと思います。とすると、ちょっと意識も変えた方が良いでしょう。例えば、大学の正門・西門側はオフィシャルな空間で、逆に東の女鳥羽川沿いはむしろ文化のサイドというように切り分けて、東側に新しいエントランスを作るぐらいのイメージがあると良いと思います。つまり松本キャンパス自体が一つの東西の回廊、パッセージになって、中心市街地と、例えば浅間温泉をつないでいくといったヴィジョンです。その中継地として赤レンガは機能すると思います。自然科学館も赤レンガも大学の正門からは遠いわけですが、女鳥羽川側の入口をきちりデザインすれば、非常にアクセスしやすい施設になるでしょう。そのように、新しい動線を私たちがどう提案できるかというところにも、割と具体的な今後の課題があると思います。

武者 なるほど。非常に興味深い提案ですね。信大は松本のパッセージ、すなわち回廊だと。そういうご意見でした。これはもう学長にお聞きするしかないんですが、大学として、きょうのテーマも赤レンガが人や街をつなぐというテーマになっているんですが、信州大学として今後もそうしたスタンスを取っていくことになるんでしょうか。

濱田 一つ言うと、私はずっと上田キャンパスにおりましたので、上田キャンパスの上田市における位置付けが明確だと感じておりました。というのは、上田市で蚕都、要するにカイコの都というのを標榜しているではないですか。その蚕都の中で、明確な位置付けというのがあります。当然のことながら繊維学部の講堂というのが蚕都を模したような構造になっていますし、先程のレンガの建物も元々は繭倉なので、位置付けがあるのですが、松本が標榜する三がく都の中の学問の都として、信州大学がどのように位置付けられているかということ、恐らく位置付けられていないのではないかと思うのです。そこが最大の問題ではないかと思っております。だから、他のキャンパスで位置付けられているのだとしたら、松本市としてもやっぱり信州大学を学問の都の一つとして位置付けていただく、そこから市民とのつながりが始まっていくのかなあというふうに思っております。ただ素直に思うところとして

は、そこで位置付けていただくと、われわれも市民の人と活動しやすくなるのではないかと感じております。

会場参加者からのコメント

武者 なるほど。つながるという意味では、今日はたくさんの市民の方もおいでいただいているので、ご意見、あるいは発表者に対する質問もあれば、ぜひ受けてみたいんですが、いかがでしょうか。

参加者A これを移築して保存するという考え方は全くなかったのでしょうか。

武者 これは土本先生でよいでしょうか。

土本 1993年にレンガ建物の調査のお手伝いに来たときには、もう壊されるという話になっていましたが、そのときに、移築保存が模索されてもよかったかと思います。有名なのは、東京にあった、フランク・ロイド・ライト設計の帝国ホテルです。私の恩師の稲垣栄三先生は、現地保存を全力投球で提案されたんですけども、今は犬山市の明治村に一部が移築保存されています。基本的には現地保存すべきかと思います。それで、どうしても保存できない場所や建物の場合は、もう一つのしかるべき場所に建物を移すということでもいいかと思います。松本市では、開智学校が移築保存です。ただ、理想を追求すると、現地ですっきりとした保存するというのがありがたくていいことだと私は考えています。

武者 よろしいでしょうか。次に、手前で手を挙げられていた女性の方。

参加者B 私はきょう何でここに来たかということと言うと、五十連隊のものだから、それをどういうふうに皆さんが話をしてくれるのかなと、それを聞きに来たんです。信州大学の病院があるとか、何とかがあるということとは関係なく、絶対にあそこに、ちゃんと戦争はいけないぞと、何をしてきたかという日本の歴史、それをもっと根本的に考えるところが大事じゃないかなということ、今長い時間をお聞きしてすごくそれを思いました。勝手な私の意見かもしれませんが、以上です。

武者 はい、ありがとうございます。非常に重みのある意見だと思います。まさにそれをわれわれが、これからあらためて始めていかなければいけないということなんだと思います。そういう意味では、われわれもまだ考えが足りないというか、これからやるべきことはまだまだたくさんあるという感じがします。他にはいかがでしょうか。お願いします。

参加者C 高校の教師をしておりますが、今、旭町中学校のテーマ学習の一貫で、毎年のように1年生をここにも連れてきますし、それから北のほうにある陸軍墓地のところにも連れて行く、あるいは山辺にある地下壕をご案内するというのを毎年、ここ10年くらいやっています。ここは旭町中学校から近いということもあり歩いて来られますが、やはり戦争ということ、今若い世代にきちんと伝えていくこと。先ほどお話があったとおり、戦争というものは絶対嫌だということをしっかり伝えていくのは若い世代だと思います。そのときに聞き取りをしたり、そういうことを音声として伝えていくことももちろん大事ですけども、モノがあるということが持つ大きな意味というものを若い世代に伝えていくことを、これからは私もやっていきたいと思っています。ぜひこれを残して、そこに連れて来ればその気持ちが分かる、平和教育というのはそういうものだと思っております。全国に戦争遺跡でいろんな保存されていて、指定の遺跡になっているというのが今130ぐらいありますけれども、一番多

いのは実はこういう軍隊の記録が一番多いです。その中で語られてきているものというのは、立派な建物ではなくて、何が行われていたかということだと思うんです。そういうことをこういう形として伝えられていくこととしてぜひ残して行って、私たちに活用していきたいというふうに思います。

武者 ありがとうございます。貴重な現場からのご意見でした。他に、そちらの奥の方お願いします。

参加者D 「赤レンガでつなぐとき、まち、ひと」このキャッチフレーズに魅力があって参りました。今まで先生方のお話を聞いていますと、赤レンガからいろんな縁があるわけです。そこからわれわれはこの赤レンガを中心に学んでいけばいい話なんです。それぞれ思いがあると思います。旭町キャンパスにこれが、たまたま信大にあるんですが、先ほどのお話ですと、軍都が学都になったと、たまたま信州大学がそういうキャンパスをうまく利用されて大学にしたという経緯だと思うんです。それで私この「赤レンガでつなぐとき、まち、ひと」を一般の人にできるだけ理解してもらおうようにお願いしたいと思っています。というのは、これから保存のために寄付を募るとしています。それには、やはり先生方のやっていく取り組みのハートを示さないと理解されないんじゃないかと。私も町会のほうの仕事をしましたので、できるだけ協力しようとしたのですが、何か今一つ目的が曖昧だというふうを感じたんです。ですから、今回はこれを大学、官、市民と、この三者でこの思いを一緒になってやれば、寄付行為のほうもだいぶスムーズにいくんじゃないかと思っています。ぜひこれを残していただいて、私たちはこれを基にして学びたい、いろんな思いがあると思います。それで、ここでなんか若い人たちが集うことのできる建物になれば素晴らしいなあと。そして、それが松本のオリジナルになれば、今以上の人気が出るかもしれません。そんなことを私は願っています。

武者 はい、ありがとうございます。励ましの意見としてわれわれも受けとめたいと思います。ありがとうございます。もうそろそろ時間ではありますが、もうひと方ぐらいい時間はありますかと思うのですがどうでしょう。

参加者E 去年か一昨年、礫山美術館がやっぱりレンガ建築で、初代の館長の平林盛人さんのお子さんでいらっしゃる平林イサオさんの講演がありましてお話を聞いたんですが、そのときのお話を思い出しました。平林盛人さん、松本市長もやられたし、初代の穂高町長もやられた方ですが、元は陸軍中将ということで、石原莞爾とか東條英機とか、そういう陸軍の上のほうといろいろやっていた方だということです。お子さんのイサオさんからお聞きした話だと、終戦のときに、五十連隊の食料を流したということで、罪に問われて年金ももらえなかった、すごく苦労したというような話を聞いて、この辺でつながってきたんです。やはり松本とも五十連隊とも関係あるということで。その辺、赤羽さんのほうもご存じでいらっしゃるって、なんかうまくつなげられればいいんじゃないかと思いました。

武者 はい、ありがとうございます。伺っていると、五十連隊はやはり地域の記憶に深く刻まれているんですね。これを掘っていくといろんなところに脈があるのだということであらためて感じます。もうそろそろ時間がまいりましたので、コメントがあるいは発表者の皆さんで、これだけは言っておきたいということが何かありますか。笹本先生お願いします。

笹本 参考までにですが、私たちが赤レンガ倉庫を登録有形文化財にしようとするときに、

戦争遺跡では困るという理事の意見があったことだけ伝えておきます。それは、大学をマイナスの意味だけで見てほしくないという理事の意識によるものだったと思います。同じものを見てそれぞれの人にはそれぞれの見方がありますので、多面的な見方をしていく必要があります。ですから、この建物も五十連隊という側面だけではなくて、例えば使用しているレンガは一体どこで誰が作って、その技術は一体どうだったのか。なぜ現在地でなければいけなかったのか。それぞれの人が足元の歴史を見ていくときの手段にしてほしいものです。私たちは未来に向かって動いていくときに、過去をしっかり見た上で、未来を見据えます。赤レンガ倉庫につきましてもそれぞれの人の経験や視野から考える必要があります。松本五十連隊だけでなく、私の場合は個人的な大学へ通っているときの記憶がありますが、倉庫として使った人、あの前で遊んだ人など、人によってさまざまな要素があることを前提にして、できれば市民と大学と、それから松本市が協力して、次の時代をつくっていくための材料にさせていただきたいものです。ささやかなことをじっくり見ていくことによっても未来の芽は見つかると思います。特定の部分や時期だけでなく、私たちは広い視野からものが考えられるようになっていきたいものだというのを、ちょっと付け加えさせていただきます。

武者 はい、ありがとうございます。これからアクションを起こしていくにあたって、羅針盤となるような言葉であると思いました。

そろそろ会を閉じなければいけません。最後に信州大学学長の濱田先生より、閉会の言葉をいただきたいと思います。お願いします。

濱田 本日はお忙しい中、多くの皆さんにお集まりいただきまして、本当にありがとうございます。われわれとしては、どういう形で赤レンガの建物を残せるかというのをそれぞれの立場で考えていかなければならないと思っております。私の発言が非常に経営的で申し訳ないのですが、今は私にとって経営的観点が一番重要なのでご容赦下さい。先生がたにとっては当然夢を語っていただくのが重要だと思っております。私自身も物理的にどう残すかということだけを考えているわけではないのですが、五十連隊の歴史も含め、様々な視点から赤レンガを残すためにどのようにすればよいかを考えることが重要であるとぜひご理解をいただければと思います。脇の話ばかり私自身はさせていただきましたが、それは赤レンガ倉庫を残すための脇の話であって、関係のない話ではございませんので、私自身の立場で赤レンガを残すためにこれからも尽力したいと思っております。

先ほどご質問いただいた方の中に、これから寄付をとということをおっしゃっていただいたかと思っております。既にクラウドファンディングを始めておりまして、まずは調査を行いたいと思っております。先程述べられた土本先生のデザインそのままになるかどうかは別として、耐震補強など、使用に耐えうる形にするには多分数千万円から1億円ぐらいかかると言われております。ちなみに先ほど紹介された教育学部の建物は大体数千万円ぐらいかかっております。建物中に炭素繊維で補強しておりますので、それぐらいの金額がかかっておりまして、最終的にはそれぐらいを寄付の目標にしていきたいと思っております。今回のクラウドファンディングでは200万円という目標で、調査をまずさせていただいて、その後実際の行動に移したいと思っております。先程も建物の周りが汚いと指摘されましたが、きれいには必ずしたいとは思っております。その上で、皆さんが建物にアクセスしやすいような形は取

らせていただきたいと思っています。ただそれには何年か時間がかかると思います。その何年かの中に、五十連隊の歴史を含めて、皆さんとこういう形でディスカッションができるような場をまた持てればと私自身は思っておりますので、またその際には皆さんにご参加いただければと思っております。

本日は、本当にいろいろな形で、私自身も知らない歴史を学ぶことができましたので、主催者側が言う言葉ではありませんが、非常によい会だったのではないかと考えています。皆さんがどう感じたかというのは、それぞれにお任せしたいと思います。またこういう機会を持って、皆さんと触れ合う機会が持てますようお願い申し上げまして、結びの言葉とさせていただきます。本日はどうもありがとうございました。

武者 本日はこれにて閉会になります。ご来場いただきありがとうございました。